

古墳時代における飛鳥地域の開発の一様相

—飛鳥京跡第 34 次調査下層遺構出土遺物の再整理から—

中野 咲ⁱ⁾・鈴木一議ⁱ⁾・岩崎郁実ⁱ⁾・繰納民之ⁱⁱ⁾・小倉頌子ⁱ⁾・丸山真史ⁱⁱⁱ⁾・高橋幸治ⁱ⁾

要旨 飛鳥宮跡は、飛鳥時代の宮殿遺構が良好に遺存するため、宮殿成立より前の飛鳥地域の土地利用を示す下層遺構の調査事例は少ない。今回報告する飛鳥京跡第 34 次調査は、飛鳥時代より前の遺構・遺物が数多く確認されている点で非常に稀な事例である。このような飛鳥宮跡の下層遺構は、奈良県遺跡地図では岡遺跡として登録されている。

今回報告する岡遺跡の調査において、明確な遺構が確認されるのは古墳時代中期半ばであり、中期後半には短期間に堅穴建物が重複して築造されている。岡遺跡では当該期以前の古墳時代の土器が確認できず、古墳時代中期半ばに突如として開発が開始されたと理解された。古墳時代における飛鳥地域の開発は、古墳時代前期末・中期初頭に飛鳥川右岸の低位段丘面である飛鳥面に立地する山田道周辺より、渡来系集団を活用して開始される。岡遺跡が立地する比較的高位の段丘面（岡面）の低位部分の開発は、古墳時代中期半ば以降であり、飛鳥川段丘面の開発が段階的に進化した様相が明らかとなった。

また、具体的な開発の内容も今回の出土遺物の再整理で明らかとなった。出土遺物には韓式系土器を含む列島内外の系譜を引く外来系土器、河内湖北岸および紀淡海峡地域・紀北地域からの製塩土器、青銅製品の鋳造の可能性が指摘される冶金関連遺物などがある。これらの出土遺物の分析により、岡遺跡は物流拠点の役割も担った生産・開発の拠点と評価される。岡遺跡の古墳時代集落は、雄略天皇七年に記される百濟からの渡来人「手末才伎」を住まわせた「下桃園」に比定されている。今回の報告により、岡面低位部分の開発が渡来系集団だけでなく、列島各地の集団の活動や彼らとの交流により進められたことも明らかとなった。

続いて古墳時代後期に入ると堅穴建物は埋没し、溝が掘削される。この他の明確な遺構は確認されず、遺物の出土量も中期と比べて格段に少ない。限られた範囲の調査ではあるが、土地利用のあり方の変化がうかがえる。また、溝からは馬歯が出土しており、土地利用の内容を示唆している。

本稿の成果は、以上のように飛鳥地域における宮殿成立より前の開発の一端を提示できたことである。

キーワード 飛鳥地域、古墳時代の開発、外来系土器、製塩土器、冶金関連遺物

I. はじめに

(1) 「飛鳥京跡」の調査と下層遺跡

奈良県高市郡明日香村大字岡を中心に所在する飛鳥宮跡は、これまでの発掘調査と研究により、大きく 3 時期の飛鳥時代の宮殿遺構が重複して存在することが明らかとなっている（林部編 2008 ほか）。飛鳥宮跡を中心とした飛鳥時代の宮殿およびその関連遺跡の発掘調査は、1960 年以降、奈良県立橿原考古学研究所によって「飛鳥京跡」の調査として行われており、その次数は 190 次におよぶ¹⁾。

飛鳥宮跡は、飛鳥時代の宮殿遺跡として著名であるが、これまでの調査で、飛鳥時代より前の時代の遺構や遺物も確認されている²⁾。なお、飛鳥京跡第 83 次調査の概報のなかで、飛鳥京跡の調査によって広範に弥生土器の出土が確認されていること、飛鳥宮跡Ⅲ期遺構内郭の北側で古墳時代の堅穴建物が検出されていることに加え、各所で古墳時代の土器の出土が確認されて

いることが指摘されている（亀田 1982）。この指摘を受け、飛鳥宮跡の下層遺跡として、岡遺跡が奈良県遺跡地図に登録され、現在に至っている³⁾。

今回再報告する飛鳥京跡第 34 次調査区は、飛鳥宮跡のほぼ中央、飛鳥宮跡Ⅲ期遺構内郭の北隣接地、すなわち外郭に位置する。また、岡遺跡のほぼ中央に位置する。上層遺構として掘立柱建物や掘立柱塀、石組溝といった飛鳥時代の宮殿関連遺構が検出され（篁 1973）、下層遺構として堅穴建物や素掘り溝、土坑が検出されている（岡崎 1973a）⁴⁾。しかし、いずれも遺構の概要と出土遺物の一部が報告されているのみであった。

近年、飛鳥京跡第 165 次調査で検出された大型の掘立柱建物 SB0934（鶴見編 2014）とその周辺の様相を明らかにすることを目的に、飛鳥京跡第 34 次調査区の西側隣接地を中心として、飛鳥宮跡の発掘調査が再開されている（鈴木 2024）。飛鳥宮跡は、飛鳥時代の宮殿遺構が良好に遺存するため、宮殿が営まれるより前の飛鳥地域の土地利用を示す下層遺構が調査されている事例は少な

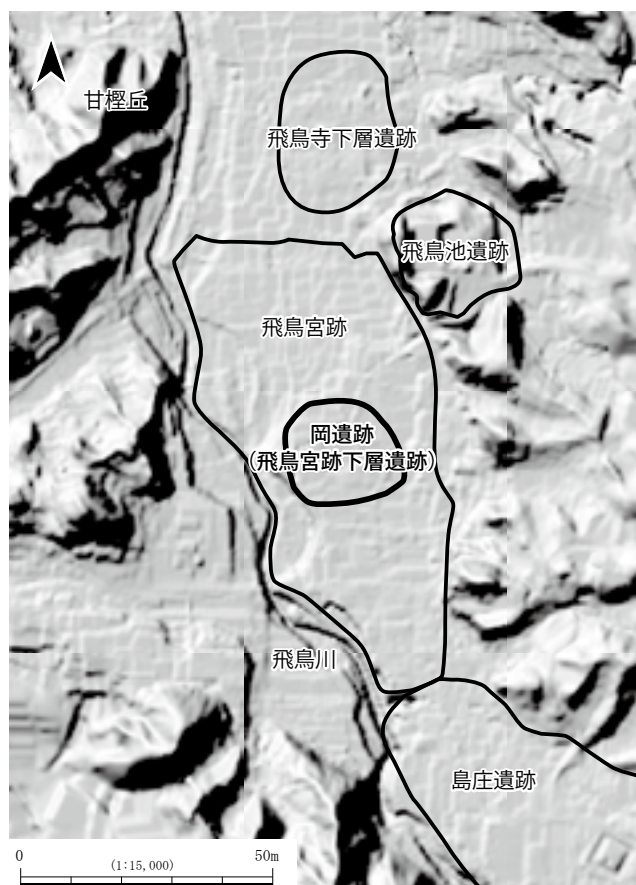


図1 岡遺跡（飛鳥宮跡下層遺跡）と周辺の主要遺跡



図2 飛鳥宮跡Ⅲ期遺構と岡遺跡の範囲

い。そのなかで、飛鳥京跡第34次調査は、飛鳥時代より前の遺構や遺物が数多く確認されている点で非常に稀な事例である。よって、今回の再報告は、飛鳥時代の前史と飛鳥地域における宮殿遺構の形成を考える上で、大変重要な位置を占めると言える⁵⁾。(鈴木)

(2) 再整理作業について

①報告の方針 今回再報告する飛鳥京跡第34次調査に関する記録は遺構を記録した原図、調査日誌類、写真類、出土土器であるが、これらは以下に記すように十分に残されているとは言い難い状況であった。したがって、今回の報告は基本的には遺物の整理に主眼を置いたものとした(第三章)。以下では残された記録の内容と整理方針に対し、下層遺構の整理作業の内容を中心に記す。

②残された遺構原図 現在確認されているのは、遺物出土状況を含む十分の一の調査区全体図とグリッドに合わせて設定されたセクションの断面図および一部遺構の平・断面図である。これらの原図は調査時に与えられた遺構番号が記載されておらず、また調査後に遺構番号の

振り替え等大きく整理が行われたものであり、調査時の一次的な情報が確認できない。加えて、セクションは上層の飛鳥時代の建物遺構の断面図の記録を目的として設定されており、今回報告する古墳時代遺構に関する個別遺構の断面図などは確認できなかった。

したがって、古墳時代遺構の報告については、概報で示された遺構略図に土器の出土地点を示すにとどめたが、調査日誌の記載や出土遺物から古墳時代の遺構と判断できたものについては、上記の遺構略図に加筆した。同様に報告文に関しても概報の記載の再録を基本とし、これに図面や調査日誌の記載から読み取った情報を追加した。

④遺構番号について 遺構番号について、調査時にはすべての遺構に500番台の番号が付与されていたが、概報作成時には主要な遺構に調査時の西暦の下2桁+遺構番号という形で4桁の番号が新たに与えられた。今回概報未掲載の遺構を報告するにあたっては、調査時に与えられた500番台の番号を用いて報告する。

⑤出土遺物について 出土遺物のうち、所在が確認でき

ないものが複数ある。例えば堅穴建物の床面から出土した遺物は、原図では取り上げ番号が付されているものの、対応する注記が記された遺物が確認できなかった。この場合は、出土状況図から読み取れる遺物の情報を遺構の記載（第Ⅱ章－（２））に加筆した。

なお、製塩土器は岡崎 1979、宇田型甕と共伴土器は平松 1993 で一部紹介されている。（中野）

Ⅱ．古墳時代の遺構

（１）基本層序と遺構面

調査区内の層序は以下に区分されている。

1 層：現代耕作土である。層厚 20 ～ 30 cm。

2 層：現代耕作土に伴う床土である。層厚約 10 cm。

3 層：灰褐色粘質土層であり、飛鳥時代の遺構を被覆する。層厚約 10 cm。

4 層：飛鳥時代遺構との重複関係の追求を目的として A ～ D の 4 層に細分されている。このため各層の層相と遺構との前後関係については、飛鳥時代遺構の報告に譲ることとする。なお、4C 層は黄色粘質土層であり、層厚約 10 cm。4 ～ 7 号住居跡周辺に堆積した古墳時代の住居跡の埋土である。層中から古墳時代の土器が多量に出土したが、帰属する住居跡は明らかでない。

5 層：黒色粘質土層であり、古墳時代の土器やわずかな古代の遺物、弥生土器を含む。調査日誌にはこの層の上面が古墳時代の生活面と記載されている。

6 層は灰色粘質土層、7 層は黄灰色バラス層である。これらの層からの出土遺物は報告されていない。なお、調査区の一部で 7 層上面に弥生土器を含む 8 層の堆積があり、遺構の可能性が指摘されている。

飛鳥時代の遺構は 4A ～ C 層上面で検出され、概報では上層遺構として報告されている。また、古墳時代の遺構は 5 層上面で検出され、概報では下層遺構として報告されている。なお、4 層の各層の分布は遍在しており、調査区の一部では、飛鳥時代・古墳時代の遺構は同一面で検出されている。

古墳時代遺構の調査は、上層の遺構保護を前提として、調査区南西部に限定して実施された。本報告では 5 層上面で検出された遺構のうち古墳時代を中心とする遺構について報告する。

（２）遺構

5 層上面で検出されており、堅穴建物 8 棟、溝 3 条、ピット 1 基、土坑 1 基などがある（図 3・4）。

① SI7212 調査区西壁際中央付近に位置する平面が一辺 5.2 m の方形を呈する堅穴建物で、建物の主軸は N30° W を指向する。遺構の重複関係から、SI7213 に後出する。また、SI7219・SD7204 が後出するため、遺構の東半が検出された。床面において周溝および柱穴は検出されていない。出土遺物は土師器高坏（図 5－a 1）、甕（a 2）のほか、土師器・須恵器片、製塩土器がある。

② SI7213 調査区西壁際中央付近に位置する平面が一辺 3.7 m の方形を呈する堅穴建物で、建物の主軸は N14° E を指向する。遺構の重複関係から、SI7212・SD7204 が後出するため、遺構の東半が検出された。壁面は直角に立ち上がる。床面において周溝および柱穴は検出されていない。また、床面の中央部分が一辺 60 cm の範囲で落ち込んでおり（図 4 網掛け部）、そこに径 5 ～ 10 cm 程度の礫が敷き詰められている。この上面には炭や灰の堆積が確認されたことから、炉の可能性が想定されている。床面からは、北東部で土師器碗形高坏（図 5－a 3）、北壁際中央部で大形高坏（a 5・7）や壺（a 8・9）、東壁際中央部で大形高坏（a 6）が出土している。また、上記の落ち込み内から土師器甕（a11・13・15）が出土しており、A 地点では須恵器壺が出土したと報告される。加えて、出土地点は不明であるが床面から須恵器坏身（a16）や土師器高坏（a 4）・甕（a12）が出土している。このほか土師器甕（a10・13・14）や製塩土器、管玉 1 点・白玉 8 点などが出土した。

③ SI7214 調査区南西隅付近に位置する平面が一辺 4.5 m の方形を呈する堅穴建物で、建物の主軸は N25° W を指向する。遺構の重複関係から南東隅を飛鳥時代の柱穴に破壊されるもののほぼ全体を検出できた。深さは約 0.3 m を測り、壁面はほぼ直角に立ち上がる。床面において周溝および柱穴は検出されていない。また、南西壁面のほぼ中央でカマドを確認した。カマドは焚口と煙道が残存し、焚口幅 0.7 m、残存長 1.1 m を測る。カマド内には多量の炭・焼土が堆積しており、支脚とみられる石が立った状態で出土した。内部からは土師器甕（図 5－a21）も出土した。さらに、カマド南側の床面からは土師器高坏（a18）が出土した。この東側で隣接して出

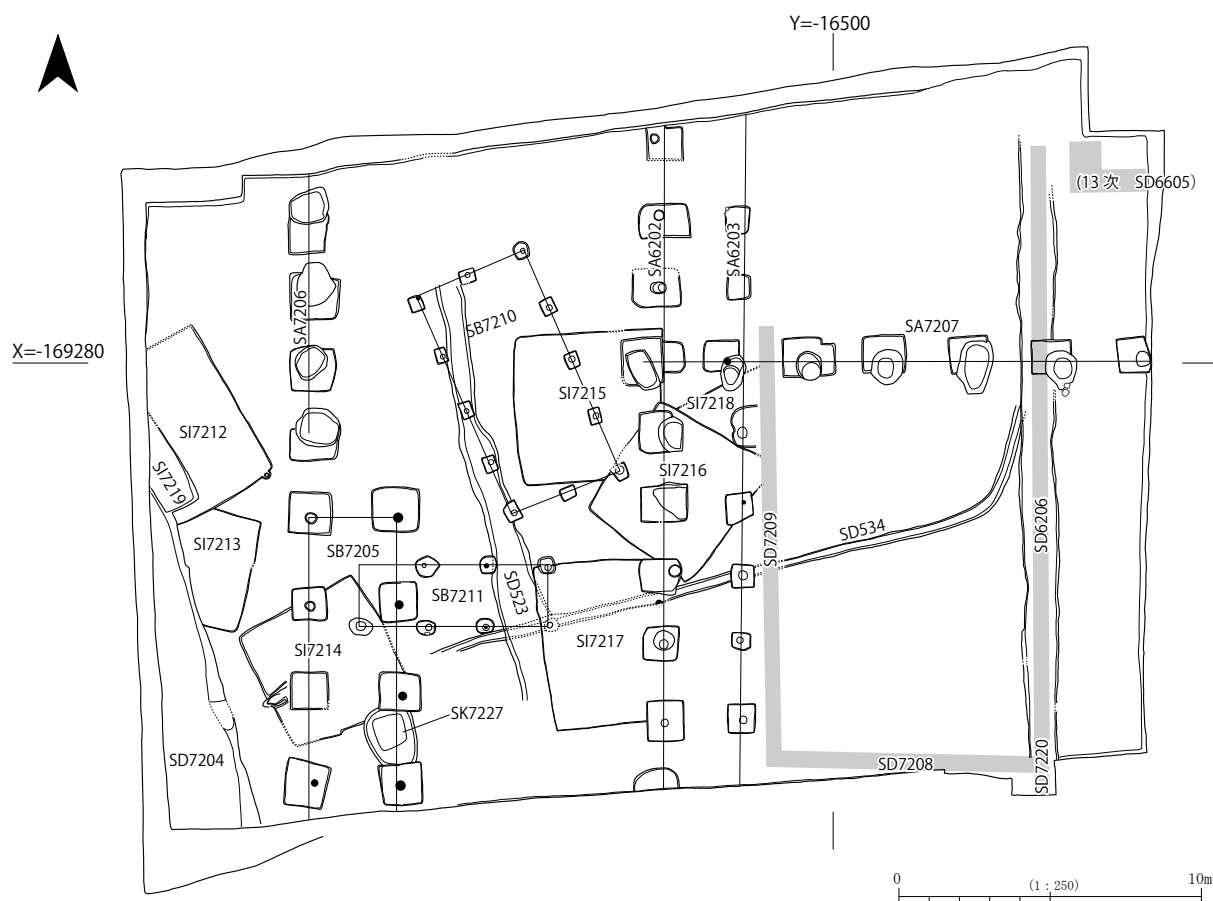


図3 飛鳥京跡 34 次調査区平面図（網掛けは石組溝）

土した A も出土状況図からは a17 あるいは a19 の土師器高坏とみられる。なお、土師器甕 22・23 は Pit ①から出土したとされるが、対応する遺構は不明である。このほか、土師器甕 (a20) や土師器・須恵器片、製塩土器が出土している。

④ SI7215 調査区中央西よりに位置する平面が一边 5.0 × 4.8 m の長方形を呈する竪穴建物で、建物の主軸は N 2° W を指向する。遺構の重複関係から SI7216 に先行する。南東隅を SI7216、北東隅付近を飛鳥時代の柱穴に破壊されている。床面では 4 本の支柱穴が確認された。また、周溝は確認されなかった。さらに、遺構の中央部では焼土が確認された。この焼土については、概報においては床面で確認され、炉の可能性があると記載されている⁶⁾。床面からは北壁際、西壁から中央部、南壁際中央部からまともって出土した。北壁際は土師器高坏 (図 6 - a25・27・35・38・39)・甕 (a41)、須恵器坏蓋 (a45)・身 (a51・50)、西壁から中央部では土師器高坏 (a28・33・34)・甕 (a43)、須恵器坏身 (a48)・器台 (a54)、

南壁際中央部では土師器高坏 (a24・26・29・34)、須恵器坏蓋 (a45) などが出土した。A は出土状況から土師器甕、C は土師器坏とみられるが出土土器との対応はできなかった。また床面からは土師器高坏 (a32・37) が出土している。なお、B は須恵器坏あるいは身とみられ、a28 の可能性が高い。加えてこのほか土師器・須恵器片や韓式系土器片 (a44) および大量の製塩土器 (図 13 - b 7 ~ 9) など出土している。

⑤ SI7216 調査区中央付近に位置する平面が一边 4.2 × 4.3 m の長方形を呈する竪穴建物で、建物の主軸は N38° W を指向する。遺構の重複関係から、SI7215・7217・SI7218 に後出する。飛鳥時代の柱穴によって中央付近を破壊されているものの、ほぼ全体が検出された。支柱穴は南西側の 2 本が確認された。周溝は確認されなかった。また、北西壁面に沿って炭層が墨重しており、炉の可能性が想定されている。出土遺物は南東壁際でまともっており、土師器高坏 (図 7 - a55)・甕 (a62)、須恵器坏蓋 (a66) などがある。中央部では土師器高坏 (a56・

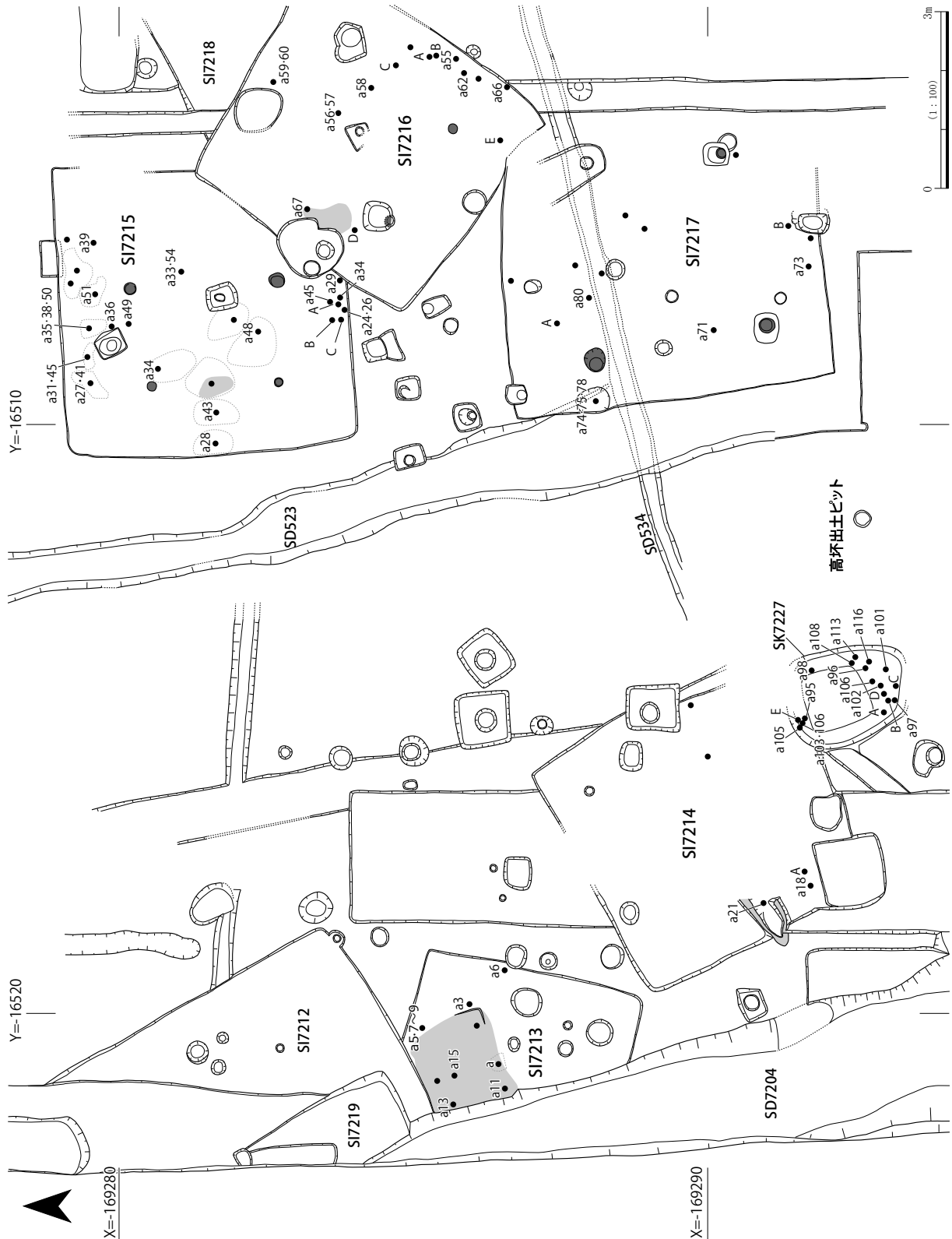


図4 古墳時代遺構平面図（●は土器出土地点。番号は図5～7・9に対応）

57・58)、北東壁際では土師器甕（a59・60）、炭層の北端では須恵器坏身（a67）が出土した。このほか、床面からは須恵器坏蓋（a64・65）などが出土したが、出土状況図からみると、南東壁際のA・Bが両者にあたる可

能性が高い。Cも出土状況から須恵器高坏（a69）とみられる。Dは須恵器坏、Eは須恵器坏蓋とみられるが、該当する土器は不明である。このほか土師器・須恵器片や製塩土器（図13－b1など）が出土している。

⑥ SI7217 調査区中央南よりに位置する平面が一辺 5.5 m の方形を呈する竪穴建物で、建物の主軸は N 8° W を指向する。遺構の重複関係から SI7216 に先行する。東半を飛鳥時代遺構によって破壊されており、西半を確認した。支柱穴は西側の 2 本を確認した。また、周溝は確認されなかった。床面からは、南壁際で土師器甕 (a73)、南東の支柱穴付近で甕 (a79)、南西部で土師器高坏 (a71)、北西部で須恵器坏身 (a80) のほか、須恵器把手付碗 (a81) が出土した。また、A は出土状況から甕、B は須恵器坏とみられるが該当する土器は不明である。さらに、西壁に接して土器が出土したピットがあり、この中から土師器甕 (a74・75)・台付甕 (a78) が出土した。このほか、土師器・須恵器片や製塩土器が出土している。

⑦ SI7218 調査区中央付近に位置する形態および規模不明の竪穴建物で、建物の主軸は N61° E を指向する。遺構の重複関係から SI7216 に先行し、北西辺の一部のみを検出した。

⑧ SI7219 調査区西壁中央付近に位置する方形を呈する竪穴建物で、建物の主軸は N30° W を指向する。遺構の重複関係から SI7212 に後出し、SD7204 に先行する。西側を SD7204 に破壊されており、南東隅を検出した。

⑨ SD7204 調査区南西隅で検出した幅 2.5 m、深さ約 0.75 m の素掘りの溝である。遺構の主軸は N30° W を指向し、北西から南東へ向かって流れる。遺構埋土は上層 (茶褐色砂質土層)・中層 (暗灰色粘質土層)・下層 (灰色粘質土層) の 3 層である。遺構の重複関係から、SI7213・7212・7219 に後出する。溝内より古墳時代の土師器・須恵器 (図 8 - a83 ~ 93)、馬歯が出土した。

⑩ SD523 調査区南西部、竪穴建物 SI7215・7216・7217 の西側を斜行する素掘り溝である。遺構の主軸は N 9° W ~ N16° W を指向する。幅は 1.2 m、深さは 0.74 m を測る。SI7217 とは重複関係をもち、前後関係は調査日誌や図面に明確に記載がないものの、掘削の順序から SI7217 が先行するとみられる。溝内より完形に近い須恵器の器台 (図 8 - a82) が出土している。

⑪ SD534 調査区東端から南西方向へ延びる素掘りの溝で、N75° E を指向する。東端では屈曲して北北東方向へ延びる。埋土は暗灰色の粘質土で、幅は 0.6 m、深さは 0.74 m である。SI7217 や SD523 に後出し、飛鳥時代の遺構に先行する。遺物の出土はないが重複関係から古

墳時代の遺構とされる。

⑫ SK7227 調査区南西隅付近に位置する平面 1.6 × 2.2 m、深さ 0.82 m の隅丸方形を呈する土坑である。図 4 では SI7214 に後出するが、概報や日誌には重複関係の記載がなく、出土土器からは SI7214 に先行すると判断される。土坑中の黄褐色粘土を含む下層からは多量の土師器高坏などの土器や、碧玉製管玉が 1 点出土した (図 9 - a95 ~ 98・101 ~ 106・108・109・113・116)。A ~ C は土師器、D・E は須恵器であるが出土土器との対応はできなかった。中央の SK7227 内土坑とされる部分の青灰色粘土層からは、土師器高坏 (a100) や直口壺 (a110)、製塩土器 (図 13 - b 2) などが出土した。

⑬ 高坏出土ピット SI7214 と 7217 間に位置する直径 0.3 m、深さ 0.3 m の円形のピットであり、埋土は灰黄色の粘質土である。土師器高坏が 2 個体納められていた。この高坏に対応する土器は不明である。 (中野)

III. 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は、上記の遺構や包含層から多量の須恵器・土師器 (図 5 - a 1 ~ 図 12 - a218)・製塩土器 (図 13 - b 1 ~ 10) や少量の冶金関連遺物 (図 14 - c 1 ~ 5)、玉類や砥石などの石製品 (図 18 - d 1、図 19 - d 2 ~ 10)・および動物骨が出土している。

(1) 土器

古墳時代の須恵器については田辺 1981、宇田型甕については赤塚・早野 2001 に拠る。また、土師器については中野 2010 に拠り、椀形高坏については口径が 15 cm 未満で比較的丁寧な作りの椀形高坏 3 類と、口径が 15 cm 以上で調整が粗雑化した 4 類に分けて記載する。

① SI7212 (図 5 - a 1・2) a 1 は土師器椀形高坏 4 類、a 2 は土師器甕である。

② SI7213 (図 5 - a 3 ~ 16) a 3 ~ 15 は土師器である。a 3 ~ a 7 は高坏であり、このうち a 3・4 は通有サイズの高坏で、a 3 は椀形高坏 3 類、a 4 は直口高坏である。a 5 ~ 7 は大形高坏で、a 5 は見込みに放射状暗文、口縁部には横位の暗文を施す。a 7 は口径 45 cm を超える特大サイズの大形高坏で、内外面には縦位の暗文を疎らに施す。a 8 は二重口縁壺、a 9 は直口壺である。a10 ~ 15 は甕で、このうち a15 は布留式甕の系譜を引く。

a16 は須恵器坏身の底部片である。このほかに須恵器

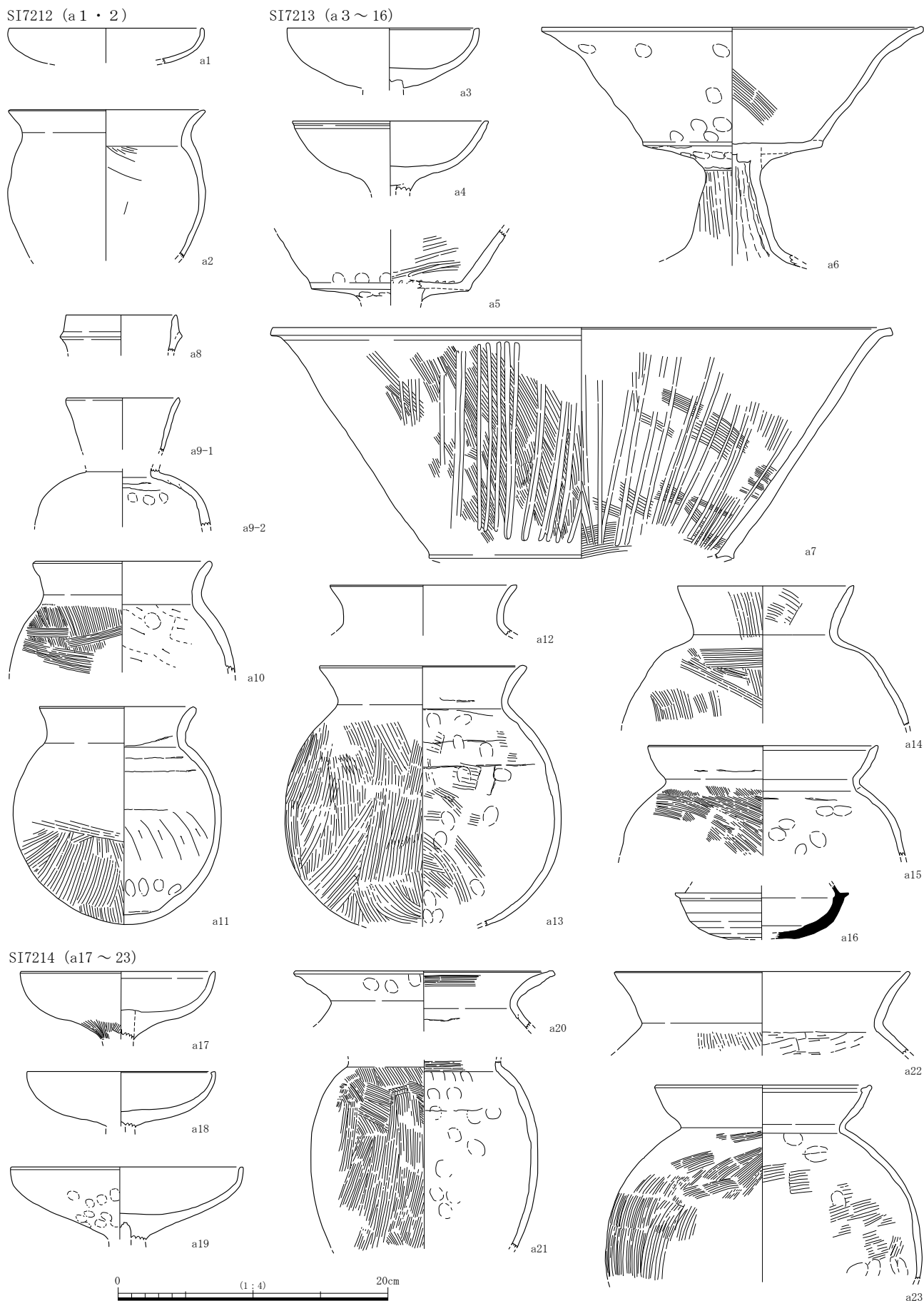


図5 竪穴建物出土土器(1)

SI7215 (a24 ~ 54)

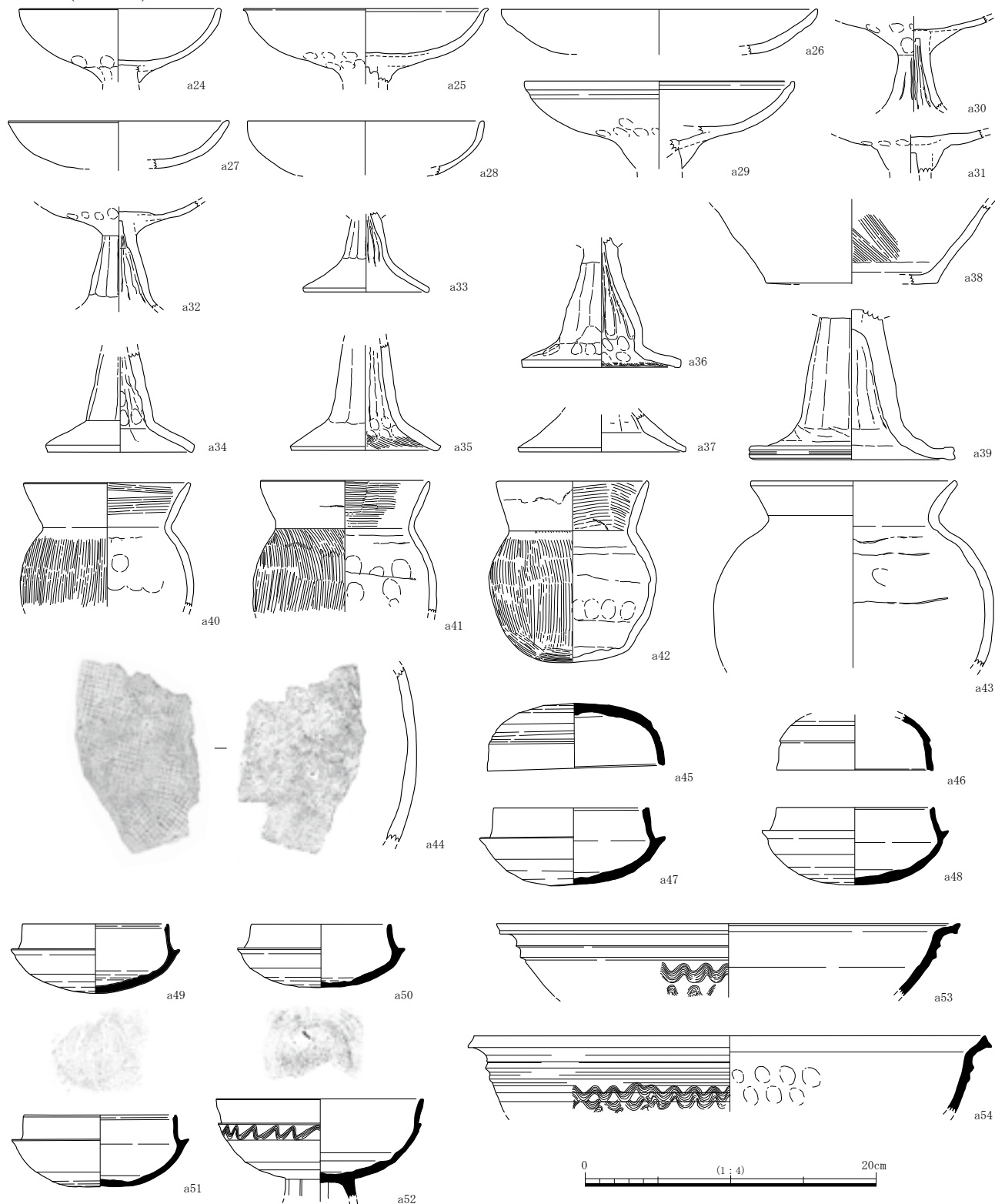


図6 竪穴建物出土土器(2)

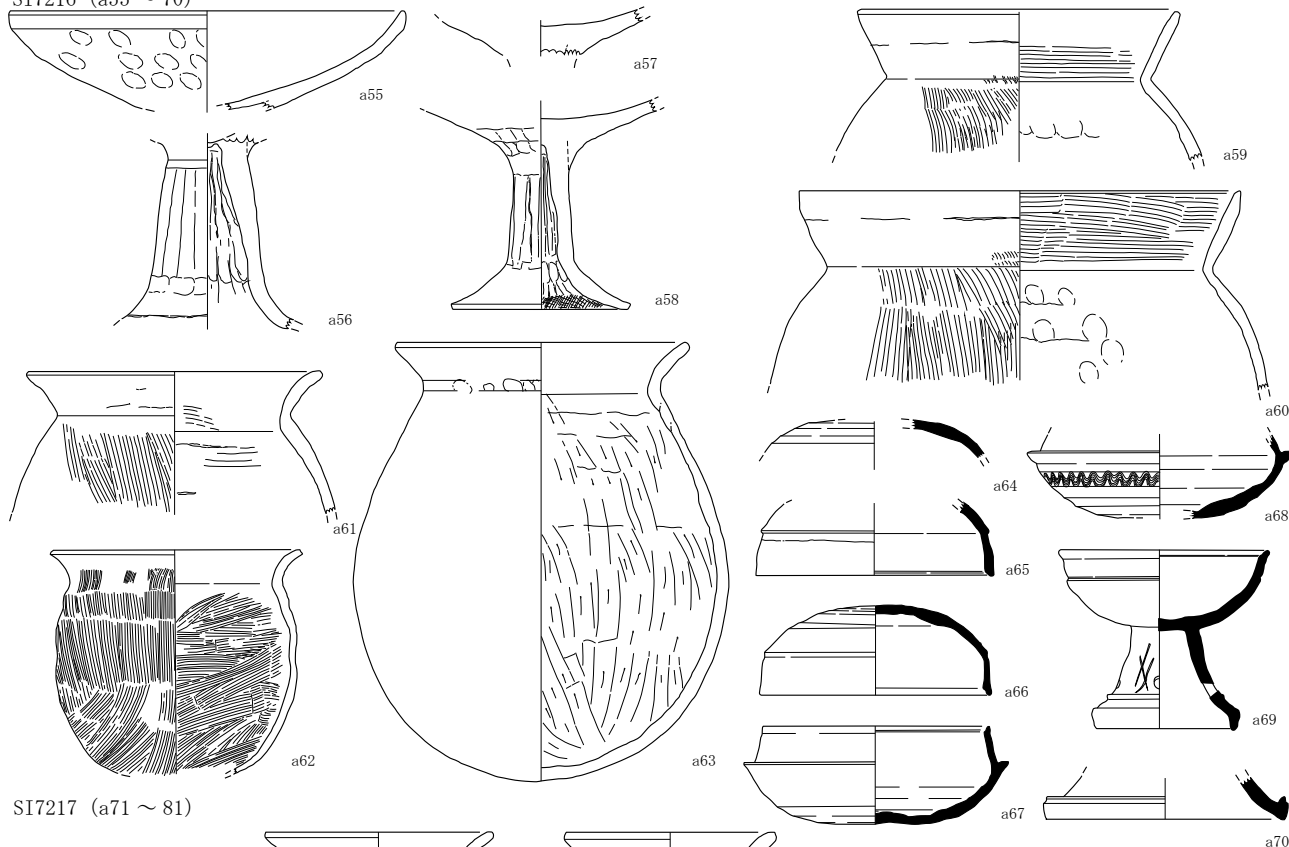
壺が出土したと報告される。

③ SI7214 (図5 - a17 ~ 23) a17 ~ 23 は土師器である。a17 ~ 19 は椀形高坏であり、このうちa17・18 は椀形高坏3類、a19 は4類である。a20 ~ 23 は甕で、このうち

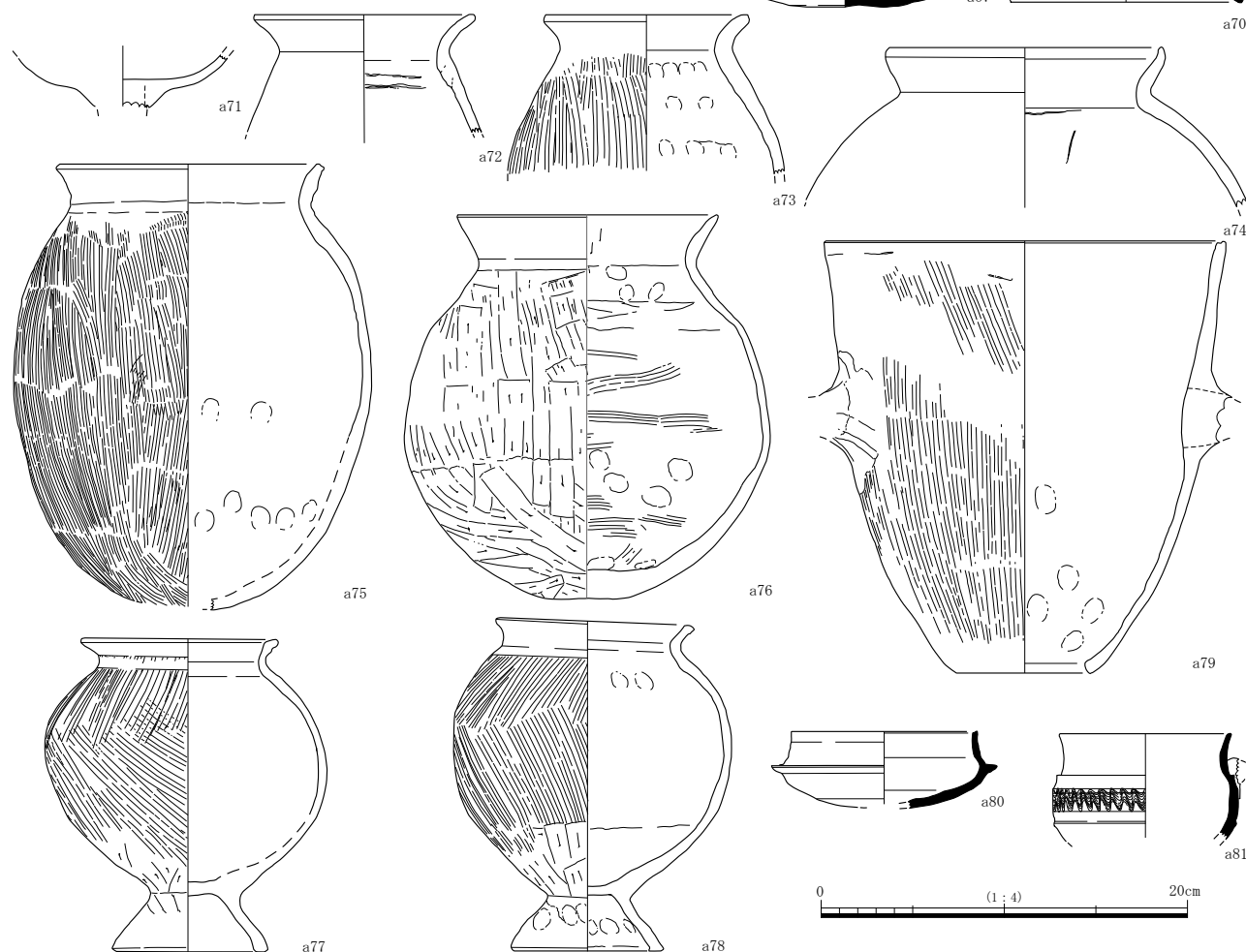
a23 は布留式甕の系譜を引くものである。

④ SI7215 (図6 - a24 ~ 54) a24 ~ 43 は土師器である。a24 ~ a39 は高坏で、このうちa24 ~ 37 は通有サイズの高坏である。a24 ~ 29 は椀形高坏の坏部で、a24 は椀形

SI7216 (a55 ~ 70)



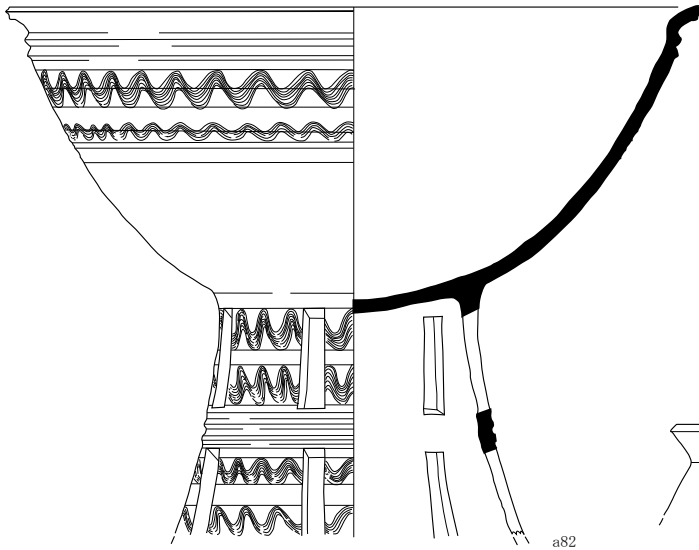
SI7217 (a71 ~ 81)



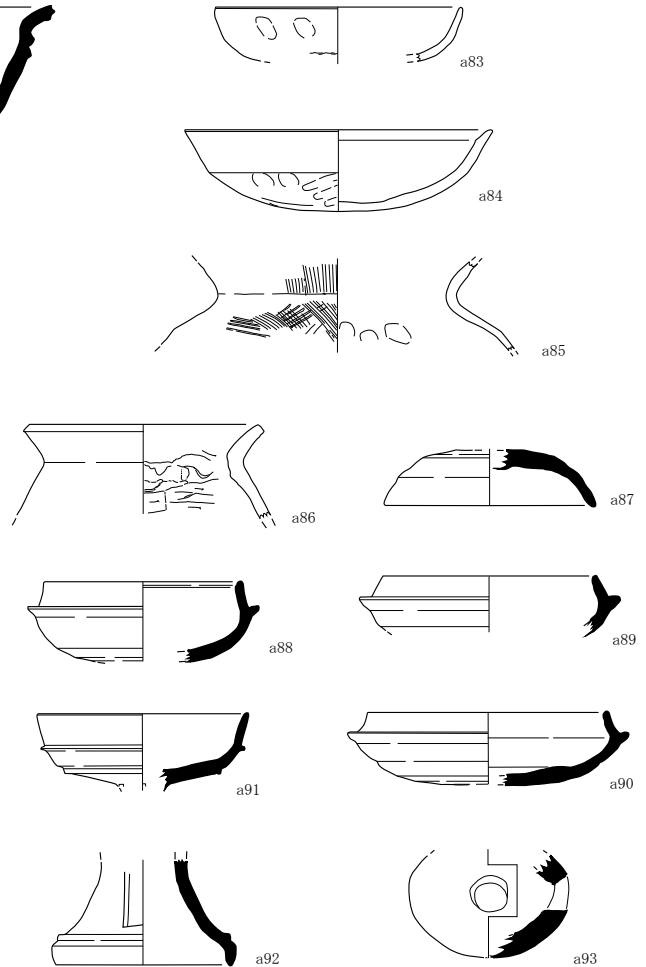
0 (1 : 4) 20cm

図7 竪穴建物出土土器(3)

SD523 (a82)



SD7204 (a83 ~ 93)



SA7207 (a94)

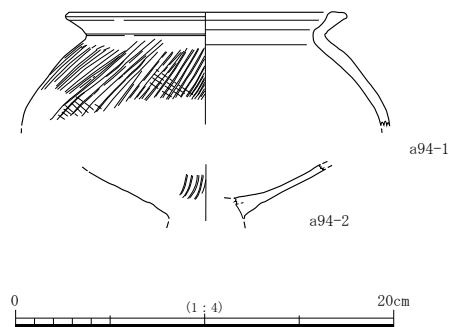


図8 各遺構出土土器(1)

高坏3類、a25～29は4類である。a30～37は脚部および裾部で、a30～36は柱状部の内面には絞り目が残る。a37は内面にケズリを施す。a38・39は大形高坏である。a40～43は甕である。a40～42は小型の甕で、全体の分かるa42の底部は平底を呈する。いずれも別個体だが、口縁部の形態や調整など、非常に類似した技法で製作されている。a43は中型の甕で、内外面をナデで仕上げる。

a44は韓式系土器の体部片である。外面には斜格子タタキ、内面はハケを施す。4C層出土の破片(図10 - a136～139)と同一個体と考えられる。

a45～54は須恵器である。a45～51は坏蓋および坏身であり、a49・50は底部にヘラ記号加える。a52は無蓋高坏、a53・54は器台である。

⑤ S17216(図7 - a55～70) a55～63は土師器である。a55～58は高坏で、このうちa55・57・58は通有サイズの高坏、a56は大形高坏で、a55は椀形高坏4類である。

a56～58は坏部底部～脚部である。a59～63は土師器甕で、口縁部が外反する。a63は外面をナデで仕上げる。a64～70は須恵器である。a64～66は坏蓋、a67・68は坏身であり、a68は底部の波状文が特徴的である。a69は須恵器無蓋高坏⁷⁾、a70は脚部である。

⑥ S17217(図7 - a71～81) a71～79は土師器である。a71は高坏の坏部底部、a72～78は甕である。a76は平底を呈する点や外面をケズリで仕上げる点が在地の甕と比べて異質で、東日本地域の影響を受けたものと判断される。a77・78は宇田型甕であり、a79は甗である。底部は蒸気孔が1孔のいわゆる寸胴タイプである。a80・81は須恵器で、a80は須恵器坏身、a81は把手付碗である。

⑦ SD523(図8 - a82) a82は須恵器器台である。外面を波状文で飾る。

⑧ SD7204(図8 - a83～93) a83～86は土師器である。a83・84は坏であり a84は口縁部に内傾する面を持ち、

SK7227 (a95 ~ 116)

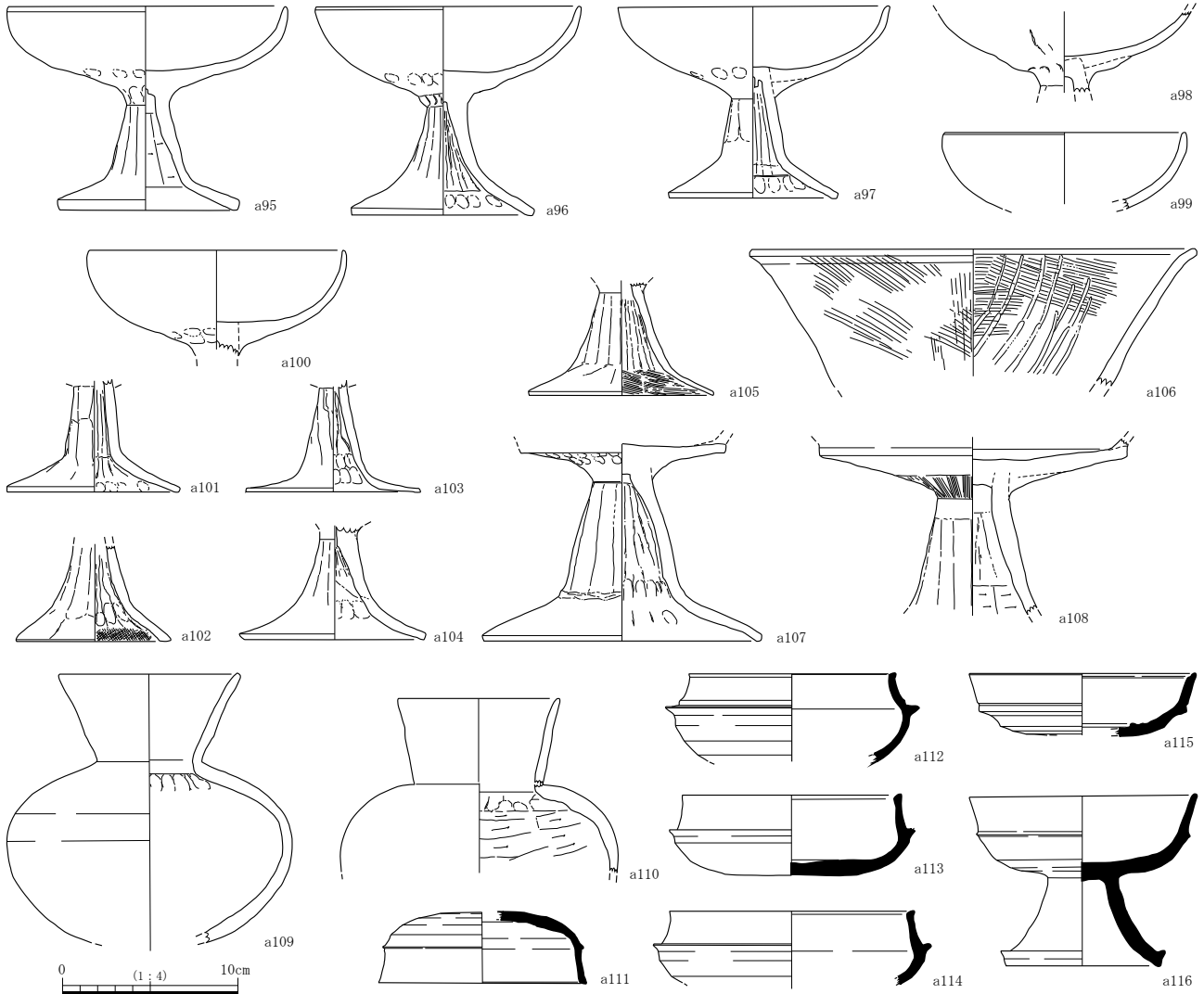


図9 各遺構出土土器(2)

外面の底部に手持ちヘラケズリを施し、中野坏2群（奈文研1980 土師器坏H）にあたる。a85・86は甕である。a85は外面には右上がりの平行タタキの後、ハケを施す。

a87～a93は須恵器である。a87は坏蓋、a88～a90は坏身である。a91は須恵器無蓋高坏、a92は高坏の脚部、a93は甕の体部である。

⑨ SA7207（図8 - a94） SA7207は飛鳥時代の掘立柱列である。遺構は上層遺構編で報告予定であるが、柱穴のうちP7から古墳時代の遺物が出土したためここで報告する。a94 - 1・2は宇田型甕で、同一個体である。

⑩ SK7227（図9 - a95～116） a95～111は土師器である。a95～108は高坏であり、このうちa95～105は通有サイズ、a106～108は大形高坏である。a95～97は碗形高坏4類、a99・100は碗形高坏3類で、a95は脚柱内面

を強く削る点特徴的である。a102は裾部内面に布目の圧痕が残る。a106は坏部内面に放射状のミガキを2段にわたって施す。a109・110は直口壺である。

a111～116は須恵器で、a111は坏蓋、a112～114は坏身、a115・116は高坏である。

⑪ 4層C（図10 - a117～152） a117～134は土師器である。a117・a118は土師器坏、a119～128は高坏であり、このうちa119～123・125～127は通有サイズの無稜外反高坏および碗形高坏である。a119は無稜外反高、a120～123は碗形高坏4類であり、a126は脚部で外面にも絞りの痕跡がみられる。a127は脚柱部上部に貫通する刺突を施し、脚柱部上面には刻みを加える。a129は小型丸底土器を模したミニチュア土器、a130は直口壺であり、内外面に原体幅の比較的大いミガキを施す。a131

4層C (a117 ~ 152)

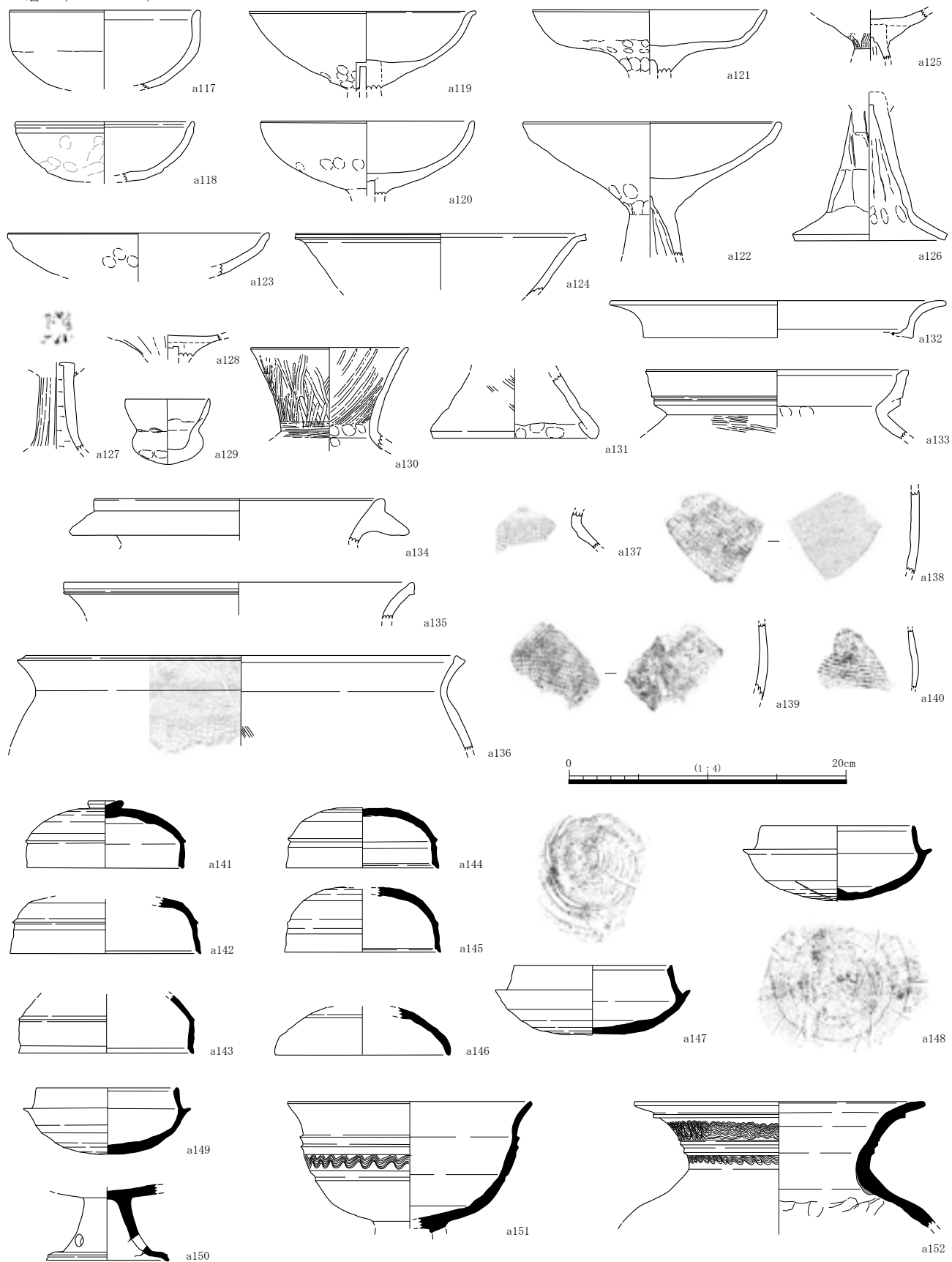


図10 4層C出土土器

5層 (a153 ~ 188)

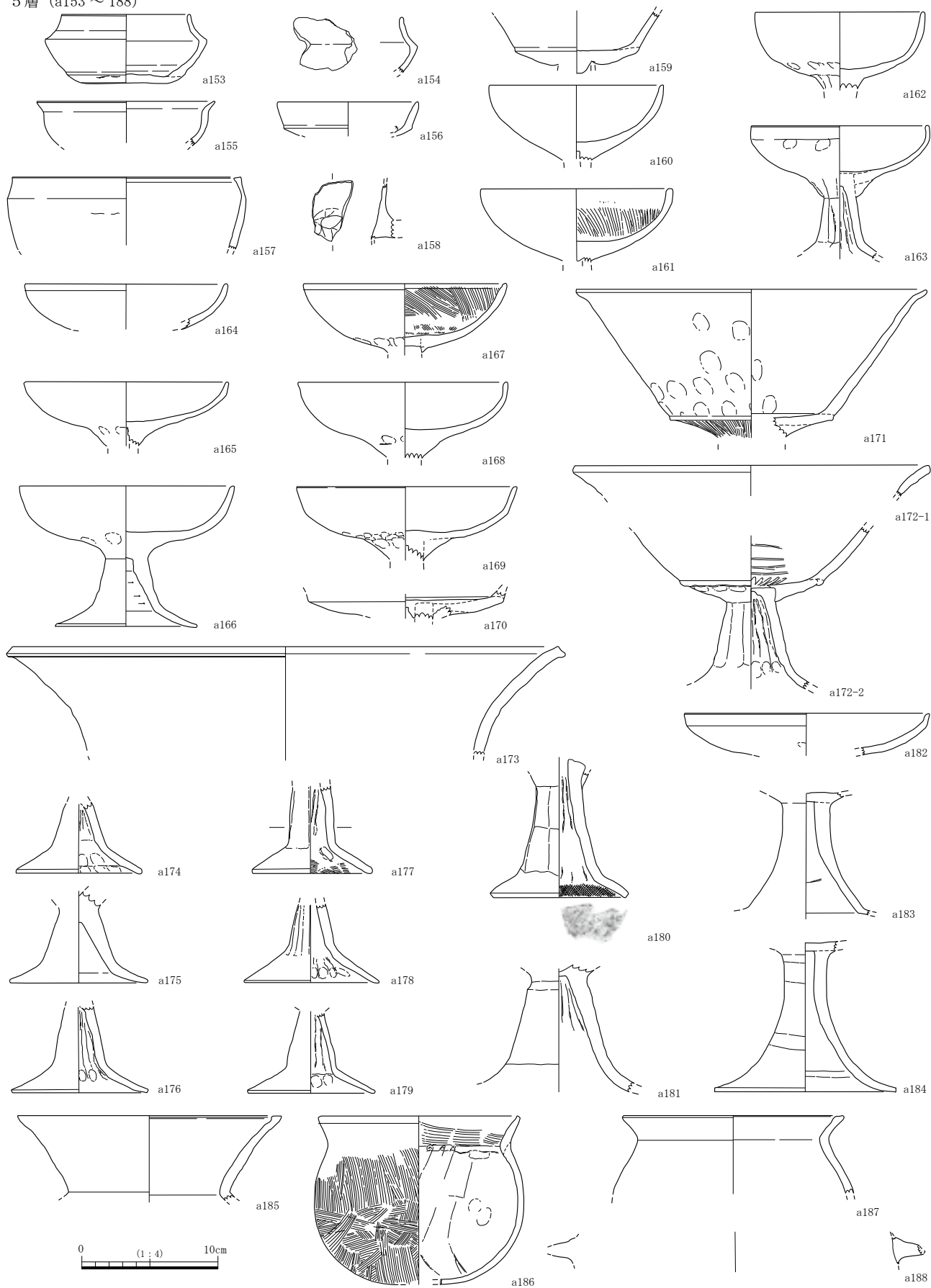


図 11 5層出土土器 (1)

5層 (a189 ~ 218)

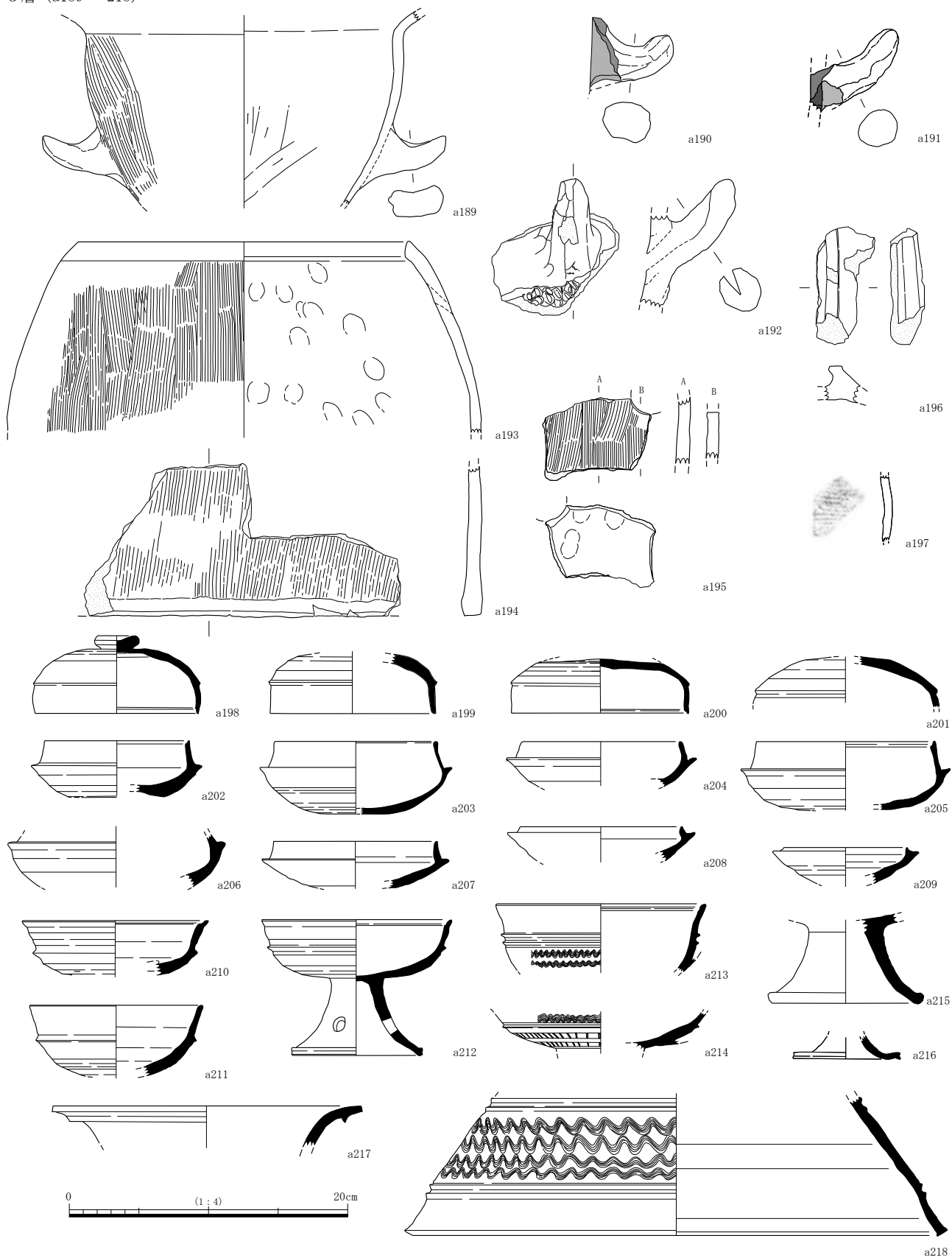


图 12 5層出土土器 (2)

は宇田型甕の台部、a132 は二重口縁壺の口縁部と考えられる。a133 は甕であり、二重口縁を呈する。a134 は羽釜であり、口縁部直下に垂下する鐔を付加する点は飛鳥地域の羽釜に特徴的である（中野 2011a）。

a135 ～ 140 は韓式系土器で、いずれも軟質焼成である。a135 は甕あるいは鍋の口縁部片で、端部に面を持つ。a136 ～ 139 は同一個体と考えられる。いずれも格子目タタキを施し、体部片にあたる。a138・139 はストロークの長い横ハケで仕上げている。内面にも横ハケを施す。図 5 - a22 と同一個体と考えられる。a140 も体部片で横位の平行タタキを施す。

a141 ～ 152 は須恵器である。a141 ～ 146 は須恵器坏蓋で、このうち a141 は高坏の蓋である。a147 ～ 149 は坏身であり、a147 は見込みに同心円当て具の痕跡が残る。a148 は底部にヘラ記号を施す。a150・151 は高坏であり a151 は大型品である。a152 は甕で内面の頸部には自然釉の溜りがみられる。

⑫ 5 層（図 11 - a153 ～ 188、図 12 - a189 ～ 218） 古墳時代の包含層である。古代の遺物をわずかに含むが、ここでは出土遺物の大半を占める古墳時代の遺物を報告する。図 11 - a153 ～ 188、図 12 - a189 ～ 196 は土師器である。図 11 - a153 ～ 156 は土師器坏である。a153 は隅消し平底で、逆くの字に屈曲する体部から、口縁部が外反しながら立ち上がる。須恵器坏身を模した模倣坏とみられ、a154 も同様の形態の杯の口縁部と判断される。内外面ともナデで仕上げ、赤橙色を呈する。a156 は坏 H とみられる。a158 は把手付壺の把手の基部である。a159 ～ 184 は高坏で、このうち a158 ～ 169・174 ～ 180 は通有サイズの高坏であり、a164 ～ 169 は同 4 類である。a166 は脚部内面に強いケズリを施す点が特徴的である。a170 ～ 173・181 は大形の有段高坏で、a173 は特大サイズである。a172 は内面の見込みに放射状の暗文、口縁部に横位の暗文を疎らに施す点が特徴的である。a174 ～ 181 は脚部で、a180 は裾部内面に布目の圧痕が残存する。a182 ～ 184 は須恵器系高坏であり、回転ナデを施す。a185 は広口壺、a186・187 は大・中型の甕である。a188 は羽釜の鐔あるいは移動式カマドの底と考えられる。図 12 - a189 は鍋、a190 ～ 192 は把手であり、甕あるいは鍋や移動式カマドに付属する可能性がある。a192 は把手の下に指押さえを施した突帯を付加している。移動式

カマドの一部であろうか。把手の断面は円形を呈し、スリット状の切込みを施す。a193 ～ 196 は移動式カマドである。a197 は韓式系土器の体部片で、外面には横位の平行タタキを施す。

a198 ～ 218 は須恵器であり、a198 は高坏の蓋、a199 ～ 201 は坏蓋である。a202 ～ 209 は坏身、a210 ～ 214 は無蓋高坏で、a213・214 は把手が付加される。a215・216 は高坏脚部、a217 は甕の口縁部、a218 は器台である。

⑬ 小結 以上の出土土器のうち、供膳器は須恵器が一定程度普及しているにも関わらず土師器が半数を占めている。青灰色を呈する須恵器に対して、土師器の供膳器は橙色を呈する比較的精良な胎土で、統一的な色調と胎土を用いて製作されている。このような組成は、土師器の役割を考えるうえで興味深い。また、土師器供膳器の中では土師器坏が客体的で高坏が主体であり、他地域と比較する上で注目すべき点である⁸⁾。

さらに、土師器高坏の大半は脚部の内面に絞り目を残し、坏部との接合の際に竹管状の刺突を施す。このような技法は、製作技術による系統分類のうち古墳時代前期の山陰地域の系譜を引く II -1 群（中野 2021・2023）であり、共通した技法で製作されていることも特徴である。一方、図 5 - a 4、図 10 - a120、図 11 - a159・161・175 は脚部と坏部の接合技法が円盤充填法であり、図 6 - a37・図 9 - a95 も脚部内面ケズリを施す点で II -1 群には該当しない。一部例外的な個体が存在することも特筆される。

次に、出土土器の時期について、土坑 SK7227 出土土器のうち須恵器は陶邑編年 TK208 型式に位置付けられる。また、土師器は椀形高坏 3 類が主体となることから、奈良盆地土師器編年 5 - i 群に位置付けられ、須恵器の時期とも齟齬はない。一方、堅穴建物出土土器（図 5 ～ 7）のうち須恵器は、TK23・47 型式、土師器は椀形高坏 3・4 類が主体となることから、5 - ii 群に位置付けられ、両者とも齟齬はない。加えて宇田型甕は赤塚・早野編年宇田型甕 3 類に相当し、氏らの編年の宇田 II 式に位置付けられ、これも須恵器の時期と調和的である。

続いて、堅穴建物群が形成される。堅穴建物は重複関係が認められるものの、出土土器は TK23・47 型式期に収まり、短期間に建て替えられたと評価できる。一方、重複関係から堅穴建物に後出する溝は、出土土器（図 8

－ a82 ～ 93) の中心が MT15 ～ TK209 型式期であり、遺構の重複関係とも調和的である。また、包含層出土土器のうち 4 層 (図 10) についても竪穴建物出土土器と同様に TK23・47 型式併行期の須恵器・土師器が主体である。後出する時期の土器を混入とすれば、竪穴建物の埋土という評価と齟齬はない。一方、5 層 (図 11・12) については TK23・47 型式併行期の土器が主体で、後出する時期の土器も含む。調査日誌には 5 層は古墳時代の遺構の基盤層であり、同時期の遺物包含層と記載されている。これについては遺構検出中に未確認の遺構の土器が混入したとの理解が妥当ではないかと考えられる。

最後に外来系土器について、韓式系土器の出土量は少なく、図 10－a136 ～ 139 にみられる格子目タタキのちストロークの長い横ハケを施す個体が認められる。これは、古墳時代中期後半～後期において飛鳥・葛城地域に遍在する煮炊器の特徴であり (中野 2011a)、韓式系土器が土師器化する過程を示すものである。この時期には、韓式系土器の受容がすでに完了しており⁹⁾、韓式系土器の出土量から渡来系集団の存在を推し量ることは難しい。しかし、造り付けカマド (SI7214)¹⁰⁾、長胴甕 (図 7－a75)、甑 (a79)、鍋 (図 12－a189) の各要素からみると朝鮮半島的な煮沸形態の実践は可能であり、渡来系集団の存在の想定も無理はない。また、列島内の外来系土器も多様にみられる。図 7－a77・78、図 8－a94、図 10－a131 のような宇田型甕は伊勢湾岸地域の系譜を引き、盆地内でも散見される。そのほか図 11－a172 のように、大形高坏の内面に横位の暗文を施す例は畿内では稀有で、山陰東部の東伯耆地域に特徴的である (中野 2024a)。加えて、坏身模倣坏 (図 11－a153・154) や、平底を呈する甕 (図 7－a76)、太い原体によるミガキを施す直口壺 (図 10－a130) は東日本地域の系譜を引く。また、図 7－a79 の寸胴の甑も蒸気孔が多孔傾向を示す盆地南部にあつては異質で、他地域の系譜を引く。以上の外来系土器のうち、SI7217 からは宇田型甕 (図 7－a77・78)、平底甕 (a76)、甑 (a79) がまとまって出土している。今後これらのセット関係の可否や詳細な系譜を検討することで、当該住居の居住者の出自に迫ることができると思われる。

以上のような盆地南部における 5 世紀後半の一括資料は、栗原カタツバ遺跡群 SX03 (関川・近江編 2003) な

どがあるが、今回集落遺跡において質量ともに充実した資料を提示できたことは成果の一つである。 (中野)

(2) 製塩土器

製塩土器は総量にして 749.6g が出土しており、ほとんどが微細な破片であるが、完形品は 3 個体ある。出土遺構は、遺物包含層、SA6202 ピット¹¹⁾、竪穴建物 SI7213・SI7215・SI7216・SI7217 の床面やピット、SK7227 がある (表 1)。製塩土器はコップ形・深碗形・浅碗形を呈する薄手小型のもので、古墳時代中期後半～後期前半に帰属する。当該期の製塩土器は製作地によって形態や製作技法が異なり、当遺跡でも複数のタイプが出土している (図 13)。

① 出土製塩土器の概要 製塩土器のタイプごとの特徴と遺跡全体での出土様相を述べる。長胴のコップ形は製作技法の違いから 5 つの類型が見出され、大きくは粘土紐巻き上げで製作される A 類 (外面ナデ)、粘土塊の叩き上げで成形される B 類 (外面平行タタキ目) に分けられる。

コップ形 A1 類 口縁部が強くすばまり、内面は工具を用いてヨコナデで調整し、外面には指掌圧痕を明瞭に留める (図 13－b 1)。胎土は砂粒を一切含まず、硬質な焼成である。大阪府岬町周辺から和歌山市にかかる紀淡海峡地域に特徴的で、当遺跡での出土量は 4.6g とごくわずかである。

A2 類 内外面をユビナデ調整し、胎土は褐色でシャモットを多く含む (b 2)。紀ノ川周辺を中心とした紀北地域を中心に分布する。遺跡全体で 72.6g と比較的多く出土している。

B1 類 外面に目の深い平行タタキ目、内面にはユビオサエ痕を明瞭に留める一群で、河内湖北岸地域に特徴的である (b 3)。遺跡内で出土したコップ形のうち最も大きな割合を占めている。

B2 類 外面のタタキ目をナデ消す場合が多く、内面はユビナデで平滑に整える (b 4)。河内湖南岸地域を中心に分布し、本調査の出土量は 8.6g とごくわずかである。

B3 類 粘土塊の叩き上げで成形するが、タタキ目をナデ消すものも多い (b 5)。胎土には黒雲母をはじめ砂粒を多く含み、器壁の厚さが 5mm 程で、他のコップ形

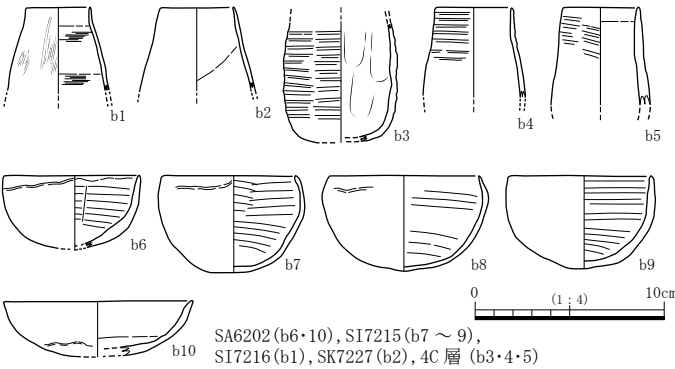


図 13 飛鳥京跡第 34 次調査出土製塩土器

が 2 ～ 4 mm であるのに比して分厚い点も特徴である。これまで十六面・薬王寺遺跡でしか確認していなかったが、当遺跡でも SI7215 と 4C 層から数片出土している。

深椀形 口径に対して器高が高く球状に近い形を呈する (b 6 ～ 9)。当遺跡例は内面を貝殻もしくはナデ調整し、胎土にシャモットを多く含むもので、紀北地域の深椀形と共通した特徴をもつ。

浅椀形 口径に対して器高が小さいもので (b10)、淡路～播磨地域を中心に分布するが、当遺跡では SA6202 から 1 点のみが出土している。

② SI7215 の様相 本調査で最も多くの製塩土器が出土した SI7215 では 316.4g の製塩土器が出土している。出土状況については、「微細化した炭化粒と灰の中から大部分が破片と化した状態」と報告されている (岡崎 1979)。出土した製塩土器は器面に著しい被熱痕跡があり、出土状況と合わせて製塩土器が火にかけられたことを推測させる。

出土製塩土器のなかでは深椀形が最も大きな割合を占め、うち完形の個体を 3 点含む。またコップ形 B3 類も集中的に出土している。

③小結 製塩土器が堅穴建物から床面について数点ずつ出土する状況は、奈良市和田ナカドフリ遺跡 (青柳編 2006) など消費遺跡でしばしば認められ、住居内で塩の消費がなされたことを推測させる。さらに、建物内での使用状況を明瞭に示す例としては SI7215 の様相が目でき、炭・灰とともに出土したことや、製塩土器の器面の著しい被熱状況から、製塩土器が付近で火にかけられた状況を想定した。同様の出土事例は、奈良盆地内では葛城市脇田遺跡の SK484 (東 1979) や田原本町十六面・薬王寺遺跡の南Ⅱ区 SK01 (松本編 1988) があり、消費

表 1 飛鳥京跡第 34 次調査出土製塩土器重量 (g)

	コップ形					深椀形	浅椀形	不明	合計
	A1	A2	B1	B2	B3				
SA6202	2.7		2.7			33.1	8.7		47.2
SD536								1.9	1.9
SI7213	1		5.3						6.3
SI7215	0.9	9.1	16.9		47.6	224		17.9	316.4
SI7216		15.3	51.6			29.7		2.5	99.1
SI7217		4.1	1.2			29.9			35.2
SK7227		24.6	17.5	2.7		1		2.9	48.7
4C 層		12	51.6	5.9	14.2	75.4		0.1	159.2
5 層		7.5	26.1					2	35.6
全体	4.6	72.6	172.9	8.6	61.8	393.1	8.7	27.3	749.6

地における塩の二次加工 (焼塩) の存在を推測させる点で特筆できる。

また本調査で出土した製塩土器は、その特徴から河内湖沿岸地域や紀伊地域など複数の産地からもたらされたものと考えられる。なかでも紀北地域のコップ形 B2 類と深椀形、河内湖北岸地域のコップ形 B1 類の占める割合が大きいたことが特筆されよう。

以上の製塩土器様相は奈良盆地内でどのように位置づけられるだろうか。まず出土量について、奈良盆地内では十六面・薬王寺遺跡の 31kg、布留遺跡の 13kg のように莫大な量が出土する遺跡、奈良県東紀寺遺跡の 935.3g のように中程度の遺跡、数破片、数 g とごく少量しか出土しない遺跡と大まかなランク分けができる (岩崎 2024b)。このうち飛鳥京跡第 34 次調査分 749.6g は中程度の量にあてはまる。突出して多くはないが、これほどまとまって出土する例も少なく、消費・流通の拠点を考える上では少なからず重要な位置にあるといえよう。

さらに製塩土器の搬入元について、盆地南部の他の遺跡と比べてみると、南西部に位置する南郷九山遺跡岩田地区 (青柳 1998) では、紀淡海峡地域・紀北地域のコップ形・深椀形が大部分を占め、河内地域のコップ形 B 類はごく僅かであった (岩崎 2022)。また盆地南部の高取町松山遺跡 (北山 2009) では紀北地域のコップ形・深椀形が大部分を占め、コップ形 B 類は確認できないという、より限定的な様相を示す。これらと比較すると、紀北地域の製品が多い点では共通するものの、河内湖沿岸地域の製品も同様に大きな割合を占める点の本遺跡の特質といえよう。河内湖沿岸地域の製塩土器は和田ナカドフリ遺跡など盆地北部で多いなかであって、南部でも

それらが多くを占める飛鳥京跡の組成は当地の塩流通ルートを考えるうえで興味深い。

遺跡の周辺では、飛鳥池遺跡や飛鳥寺下層、石神遺跡でも古墳時代の製塩土器が出土しており、一帯の土器様相の比較検討を重ねるなかで飛鳥地域の塩の消費・流通の特質が一層明らかとなることに期待する。（岩崎）

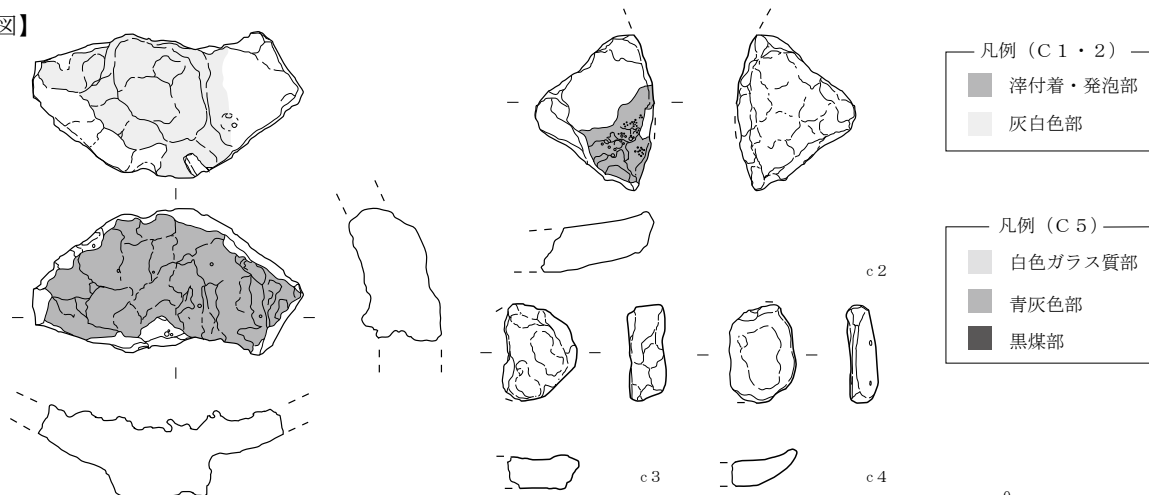
（3）冶金関連遺物

①考古学的分析 図14－c1・2は、銅熔解坩堝である。c1は、底部周辺のみを遺存する。厚さは最大で2.7cmである。内面には銅滓が付着する。外面にはおよそ4cm径の不定形な高台状の盛り上がり認められ、その周辺に坩堝の胎土とは異なる灰白色部が存在する。X線写真の観察から、坩堝と高台部分（支持台）を粘土で固定した可能性が考えられる。支持台の厚さはおよそ1.4cmと推定される。139.0g。c2は、口縁部片である。厚さはおよそ1.7cmである。内面には滓がわずかに付着し、発泡痕跡も存在する。外面には手捏ね痕が認められる。復元径は不明。19.4g。c3・4は、土製品である。いずれも表面の中央部分が凹み、坩堝の支持台に該当する可能性があるため図化した。c3は、厚さ1.2cmである。

13.5g。c4は、厚さ1.0cmである。8.9g。c5は、羽口である。排気部であるが先端は欠失する。厚さ1.95cm、孔径約2cmをはかる。外面には指頭押圧痕が認められ、被熱還元色帯がめぐる。内面の孔部は平滑であり、やや黒煤状の沈着が認められる。39.5g。c1～5はいずれも5層からの出土である。

c1・2のような専用坩堝が存在し、肉眼および後述の自然科学分析によって、内面に銅滓の付着が確認できたことから、当遺跡内で青銅製品の casting が行われていたことが明らかとなった。本資料群は中期後半の包含層から出土している点も注目される¹²⁾。近畿における中期の坩堝の出土例は、大阪府垂水遺跡や奈良県内膳北八木遺跡例が存在するが、いずれも転用坩堝である。当遺跡のような専用坩堝の使用事例は、群馬県三ツ寺I遺跡に確実な事例が認められるが、同時期の近畿においては現状確認できない。飛鳥地域においても、最初期の冶金関連遺物に位置付けられる（加藤ほか2011）。また、c1のように高台の付く坩堝は、飛鳥期以前には確認できず、先述のように高台部分が別個体（支持台）である可能性がある¹³⁾。飛鳥池遺跡では支持台の出土例が存在し（安田ほか2021）、今後資料間の系譜関係の検討が必要と

【実測図】



【X線写真（縮尺は任意）】

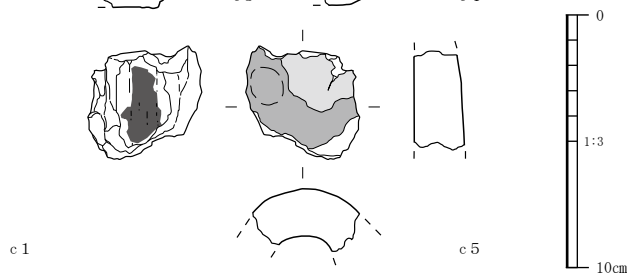
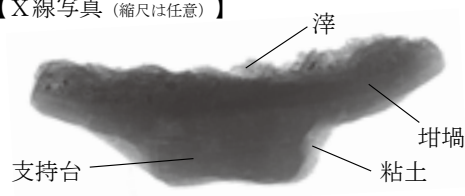


図14 冶金関連遺物

表2 測定条件

	据置型	ハンドヘルド型
X線管球	ロジウム (Rh)	ロジウム (Rh)
管電圧	30kV	40kV
管電流	自動	11uA
照射径	3mm	3mm
測定時間	100sec	60sec
測定雰囲気	大気	—

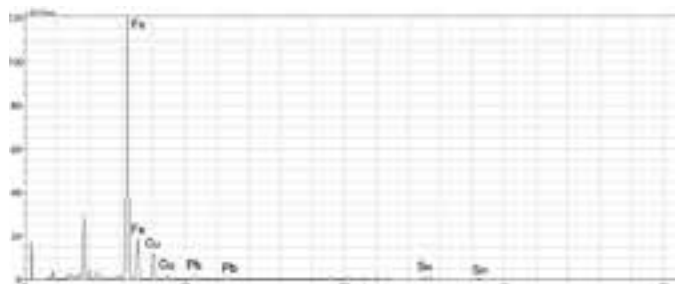


図15 c1の分析結果

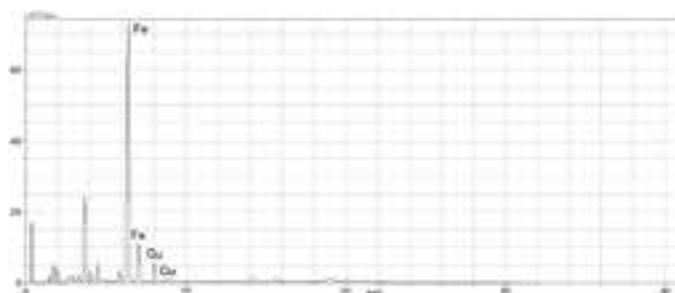


図16 c2の分析結果

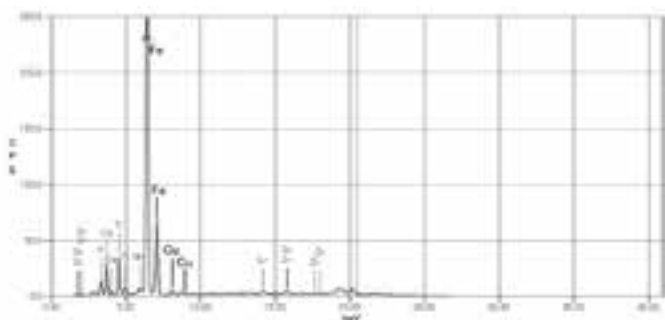


図17 c5の分析結果

なる。(繰納)

②自然科学的分析 当該埴塙が用いられた金属の種類を調査するため、蛍光X線分析を行なった。対象試料は破片3点(c1・2・5)であり、金属の痕跡や熱による変質が認められる部分を分析した。分析では、試料の形状に合わせてc1および2はハンドヘルド型(Tracer

5g (Bruker))、c5は据置型(JSX-3100R II (日本電子))の分析装置を用いた。各分析装置の測定条件は表2に示した。分析にあたっては、実体顕微鏡により対象面を観察し、分析に適した部分を選定した。各試料とも複数箇所分析し、分析面と反対面または破断面の素地を比較のため分析した。

各試料個別の検討は後述の通りである。いずれの試料でも鉄(Fe)が顕著に検出されたほか、素地や土壤に由来する元素が検出された。今回は非破壊分析であるため、これら元素は金属由来の元素と区別することは困難である。したがって、ここではFeなどは検討対象から除外することとした。

c1 実体顕微鏡観察では、部分的に銅の痕跡が確認できた。金属付着部分は銅(Cu)が多く検出されたほか、スズ(Sn)と鉛(Pb)が検出された。以上より、本試料は青銅製品の鑄造に利用された可能性が高い。なお、素地部分からもCuをわずかに検出したが、SnやPbは検出されなかった。

c2 Cuが多く検出されたが、c1のようなSnやPbは検出されなかったため、青銅製品に用いられたという確証は得られなかった。ただし、素地部分と比較してCuのピークが顕著であったことから、銅製品に関連する資料である可能性は考えられる。

c5 Cuは検出されたがSnやPbは検出されなかった。また、Cuのピークも低く、素地と比較してCuの検出量に大きな差異が認められなかった。ただし、本試料は鞆羽口の一部であり、直接金属に触れる部位ではないことから、矛盾する分析結果ではないと考えられる。(小倉)

(4) 石製品

①砥石 図19-d1は砂岩製の砥石である。5層から出土した。残存する面は砥面として使用する。(中野)

②玉類 白玉16点、管玉1点が出土したと報告されているが、現在確認できたものは、白玉8点と管玉1点であり、出土位置も明らかではない。

白玉(図18-d2~9) 白玉は計8点が出土している。直径は最大で5mm、長さは2.2~3.5mm、穿孔径は最大で1.8mm、最小は1.2mmである。

管玉(d10) 管玉は1点のみ。直径4.5mm、長さ24.9mm。穿孔径は1.8mmである。材質は滑石で、色調は灰緑色。

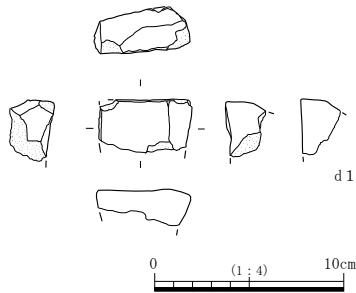


図 18 砥石

表 3 玉類計測表

No.	種類	直径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)
d2	白玉	5	2.3	1.8
d3	白玉	4.6	2.3	1.2
d4	白玉	4.4	2.3	1.4
d5	白玉	4.5	2.6	1.3
d6	白玉	4.6	3.5	1.3
d7	白玉	4.6	2.6	1.3
d8	白玉	4.6	2.6	1.4
d9	白玉	4.5	2.2	1.3
d10	管玉	4.5	24.9	1.8

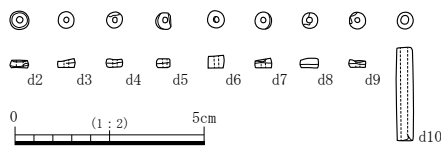


図 19 白玉・管玉

両面穿孔であろう。光沢はそれほど無いが、表面は滑らか。最終段階での仕上げ研磨は、丁寧である。（高橋）

（5）動物遺存体

①出土動物遺存体の概要 哺乳類 2 点の細片化した遊離歯が出土している。1 点は SD535 から出土しており、下顎臼歯（右？）である。残存高は約 45mm を測り、西中川駿（1991）に倣えば、10 歳以下の若齢から壮齢と推定される。もう 1 点は、第 5 層から出土したウマの臼歯であるが、上下、左右を特定できなかった。残存高は約 43mm を測り、10 歳以下の若齢から壮齢と推定される。これらは古墳時代中期から後期にかけてのものと推測され、当地付近においてウマが飼育されていたことを示唆する。

②小結 近辺では、飛鳥川より西方の藤原京十一條朱雀大路跡で 5 世紀代の土器を多く含む落ち込みから、馬歯

20 点が出土している（丸山 2017）。飛鳥川流域では、ウマが渡来して間もない古墳時代中期に、その飼育が開始していたことが窺える。当資料を含む近年のウマの出土例の増加により、奈良盆地の南部におけるウマ利用の展開を明らかにできる貴重な資料である。（丸山）

IV. おわりに

以上の報告から、調査区内の土地利用の変遷についてまとめる。

明確な遺構が確認されるのは古墳時代中期半ばであり、土坑 SK7227 が掘削される。この時期をさかのぼる古墳時代の土器は出土しておらず、当地域の開発は古墳時代中期半ばに突如として始まっている。

飛鳥地域における古墳時代の開発は、当調査区から北方約 1 km に位置する山田道周辺から開始される（坂 2018）。山田道は飛鳥川右岸の河岸段丘のうち飛鳥面と呼ばれる低位段丘に立地する。一方、当調査区は飛鳥面のさらに上位の段丘面である岡面に立地する（武久 1979）。また、当遺跡から南方 500 m に位置する島庄遺跡は、古墳時代前期から継続しており、同じ岡面のうちでもより高所に立地している。このように遺跡の立地と集落の消長からみると、当遺跡の立地する岡面のうち低位部分への開発の着手は飛鳥地域の中でも最も遅い古墳時代中期半ばであり、飛鳥川の河岸段丘の開発が段階的に進行したと理解される。

岡面低位部分の地形形成過程については、当遺跡からおおよそ 100 m 西側の同じ岡面で実施された飛鳥京跡第 165 次調査の自然科学分析により明らかになっている。これによると、調査地周辺は土石流的な堆積物が 1 m 程度堆積するイベントが 1 回だけではなく複数回の可能性もある不安定な時期が 4 世紀前半頃まで続き、4 世紀後半から 6 世紀半ばまでは安定した堆積環境であったとされる（高田 2014）。岡面低位部分における開発の進行はこのような地形の発達過程とも調和的である。なお、飛鳥川左岸の川原寺寺域北限の調査でも当遺跡と同時期の遺構・遺物が出土しており（樋口・松永 2024）、古墳時代中期半ば以降飛鳥川両岸において岡面低位部分へが開発が進行したことがうかがえる。

その後中期後半に入ると、短期間に竪穴建物の複数回の建て直しが行われ、開発が本格化した様相が看取され

る。今回の出土遺物の再整理により、この集落で実施された具体的な開発の内容も明らかとなった。注目すべき出土遺物には青銅製品の鑄造の可能性が指摘される冶金関連遺物があり、金属器生産を行っていた可能性がある。また、韓式系土器を含む列島内外の系譜を引く外来系土器、河内湖北岸および紀淡海峡地域・紀北地域からの製塩土器などの外来系遺物から、岡遺跡は物流拠点の役割も担った生産・開発の拠点と評価される。

なお、西口壽生は岡遺跡を雄略天皇七年に記される百濟からの渡来人「手末才伎」を住ませた「上桃原」「下桃原」「真神原」のうち「下桃原」に比定する（西口 2002）。今回の報告により、このような渡来系集団を用いた開発の実態が明らかになったことは大きな成果である。加えて、外来系土器を中心とする出土遺物の分析により、渡来系集団だけでなく列島各地の系譜を引く集団の活動や彼らとの交流により集落の経営が成り立っていたことも特筆すべき成果といえる。

続いて古墳時代後期に入ると堅穴建物は埋没し、溝が掘削される。この他の明確な遺構は確認されず、遺物の出土量も中期と比べて格段に少ない。限られた範囲の調査ではあるが、中期とは異なる土地利用のあり方がうかがえる。なお、溝からは馬歯が出土しており、土地利用の実態を示唆している。

以上のように、飛鳥地域における宮殿成立より前の開発の一端を提示できたことが本稿の成果である。（中野）

- i) 橿原考古学研究所 なかの さき
すずき かずよし、いわさき いくみ
こくら しょうこ、たかはし こうじ
- ii) 京都大学大学院生 そうのう たみの
- iii) 東海大学人文学部 まるやま まさし

本稿には JSPS 科研費 20K13239・20K13240 の成果の一部を含む。

本稿執筆にあたって、以下の方々のご指導、ご助力をいただきました。末筆ながら感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

岡崎晋明 森川 実 丹羽崇史 松永悦枝 清水邦彦
菊池 望 坂 靖 青柳泰介 鶴見泰寿 奥山誠義 川
部浩司 西川和陽

註

- 1) 2024 年 9 月現在。
- 2) 飛鳥宮跡Ⅲ期遺構内郭の中央東寄りに位置する飛鳥京跡第 42 次調査区では縄文時代の堅穴建物や土器、古墳時代の堅穴建物や土師器・須恵器（田坂 1974）、飛鳥宮跡の南端、唯称寺川の北岸に位置する同第 72 次調査区では縄文時代の配石遺構や土器・石器（今尾 1981）、第 42 次調査区の南に隣接する同第 83 次調査では縄文時代の土器、弥生時代の土坑状遺構や土器、古墳時代の土師器・須恵器（亀田 1982）、飛鳥宮跡Ⅲ期遺構内郭の南東隅に位置する同第 106 次調査では縄文時代の土器が報告されている（小澤 1984）。なお、飛鳥京跡第 42・72・83・106 次調査出土の縄文土器および同第 83 次調査出土の弥生土器については、卜部行弘によってその様相が報告されている（飛鳥資料館編 2015）。
- 3) 岡遺跡の範囲は、今回再報告する飛鳥京跡第 34 次調査区を中心に設定したものとみられる。しかし、註 2 でも確認したように、古墳時代以前の遺構や遺物は、飛鳥川によって形成された低位段丘面のなかでも、いわゆる岡面（武久 1979）と呼ばれる段丘面を中心に分布しているものとみられる。
- 4) 以下では両者を概報と呼称する。
- 5) 上層遺構およびそれに伴う出土遺物については、別途再報告する予定である。
- 6) 一方、岡崎 1973b では、「北壁に沿って数十個体の分の製塩土器が、大半は破損した状態であるが固まって出土していた。」とあり、また、岡崎 1979 では堅穴建物が廃絶した後にはさほど時間を経ることなく同じ場所で径 1.5 m 程の範囲に火を使用した痕跡を検出したとされ、ここから製塩土器が多量に出土したとある。
- 7) a69 は概報第 6 図－8 を再トレースした。
- 8) TK23・47 型式期の磯城郡田原本町十六面・薬王寺遺跡南 I 調査区 SK-02 では供膳器のうち土師器高坏が 15%、土師器坏が 10% を占め、杯の割合が高い（中野 2022）。また、TK208～47 型式期の和歌山県八条北遺跡北佃地区 SR-1（中野 2011b、宮原編 2020）では、筆者が前掲十六面・薬王寺遺跡で実施した方法（中野 2022）と同様の口縁部計測法でカウントしたところ、供膳器のうち土師器高坏が 21%、土師器坏が 30% を占め、坏の割合が高く、坏が高坏を凌駕している。

- 9) 飛鳥地域の韓式系土器の受容は畿内でも卓越して早く、TK73・216型式期には、長胴甕・甗・鍋からなる朝鮮半島的な煮炊器の組成が成立し（中野・中久保 2013、中野 2012・2013）、蒸す調理も専用の長胴甕で行っている（中野 2024b）。
- 10) 造り付けカマドは中期前半には畿内全域に普及する（中野 2024b）。
- 11) SA6202 は飛鳥時代の遺構であり、出土した製塩土器は混入品である。
- 12) ただし、本遺跡の上層出土資料の中にも、埴塼や鋳型の可能性がある土製品などが存在しており、これらが上層資料の混入品である可能性も現段階では否定できない。
- 13) 奈良文化財研究所の丹羽崇史氏からは、①古墳時代に支持台を利用した鋳造が行われた可能性はあるが、当該資料のような形状で、埴塼の底面を安定化できたかどうかについては疑問が残ること、②通有の埴塼と胎土の質感が異なること、③厚みが薄く、耐久性が乏しいことの3点をご指摘いただいた。

引用・参考文献

- 青柳泰介 1998「南郷遺跡群：南郷岩田・南郷鍋田・井戸大田台・南郷田鶴・佐田柚ノ木地区：発掘調査概報：御所市」『奈良県遺跡調査概報 1997年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 青柳泰介（編）2006『和田ナカドフリ遺跡発掘調査報告書』奈良県文化財調査報告書第115集 奈良県立橿原考古学研究所
- 青柳泰介 2007「製塩土器小考—古墳時代中後期の奈良県を中心として—」『考古学に学ぶ』（Ⅲ）森浩一先生傘寿記念献呈論集 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 愛知県埋蔵文化財センター
- 飛鳥資料館（編）2015『飛鳥の考古学2014』飛鳥資料館カタログ第32冊 飛鳥資料館
- 東 潮 1983「脇田遺跡第2次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1981年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 今尾文昭 1981「飛鳥京跡第72次調査（岡75-1番地）」『奈良県遺跡調査概報 1979年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所

- 岩崎郁実 2022「奈良盆地における製塩土器—布留遺跡、十六面・葉王寺遺跡、南郷九山遺跡を対象に一」『国家形成期の近畿地方における馬と塩の関係に関する基礎的研究』平成31年度～令和3年度科学研究費基盤研究(C)(一般)成果報告書 奈良県立橿原考古学研究所
- 岩崎郁実 2024a「第3章 奈良県出土製塩土器集成—古墳時代中・後期を対象に一」『国家形成期の手工業生産と家畜利用』文部科学省科学研究費助成事業学術変革領域研究(A)「動物考古学から探るユーラシア家畜文化のダイナミズム」中間報告書 東海大学人文学部
- 岩崎郁実 2024b「布留遺跡における古墳時代中期の製塩土器」『布留遺跡の考古学—物部氏隆盛の地—』六一書房
- 岡崎晋明 1973a「第34次発掘調査（下層遺構）」『飛鳥京跡—昭和47年度発掘調査概報—』奈良県教育委員会
- 岡崎晋明 1973b「古墳時代堅穴住居址の一例」『青陵』No.22 奈良県教育委員会
- 岡崎晋明 1979「内陸地における製塩土器—奈良盆地を中心に—」『橿原考古学研究所論集』第四 吉川弘文館
- 小澤 毅 1984「飛鳥京跡第106次調査概要」『奈良県遺跡調査概報 1985年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 亀田 博 1982「第83次調査の概要」『奈良県遺跡調査概報 1981年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 加藤真二・成田聖・丹羽崇史 2011『飛鳥の冶金関連遺跡』奈良文化財研究所飛鳥資料館
- 北山峰生 2009『松山遺跡』奈良県文化財調査報告書第134集 奈良県立橿原考古学研究所
- 鈴木一議 2024「飛鳥宮跡第189次調査」『奈良県遺跡調査概報 2022年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 関川尚功・近江俊秀（編）2003『栗原カタソバ遺跡群』奈良県立史跡名勝天然記念物調査報告第65冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 篁園勝男 1973「第34次発掘調査（上層遺構）」『飛鳥京跡—昭和47年度発掘調査概報—』奈良県教育委員会
- 武久義彦 1979「飛鳥—その地形的一考察」『地理』第24巻第3号 古今書院
- 田坂正昭 1974「第42次調査（都宮に先行する遺構）」『飛鳥京跡—昭和48年度発掘調査概報—』奈良県教育委員会
- 高田将志 2014「飛鳥京跡第165次調査地点における堆積層の¹⁴C年代とOSL年代」『飛鳥京跡』VI 奈良県立橿原考古学

研究所調査報告第 117 冊 奈良県立橿原考古学研究所

田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店

鶴見泰寿（編） 2014『飛鳥京跡Ⅵ―吉野川分水の発掘調査―』
奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 117 冊 奈良県立橿
原考古学研究所

中野 咲 2010「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器
編年とその特質」『橿原考古学研究所紀要』第 33 冊 奈良
県立橿原考古学研究所

中野 咲 2011a「回転性を有するヨコハケを施した煮炊具―
奈良盆地の事例について―」『韓式系土器研究』XI 韓式
系土器研究

中野 咲 2011b「八条北遺跡（大和郡山ジャンクション A・E・
K・L 地区）北佃地区」『奈良県遺跡調査概報』2010 年度（第
二分冊） 奈良県立橿原考古学研究所

中野 咲 2012「大和地域」『集落から探る古墳時代中期の地
域社会－渡来文化の受容と手工業生産－』古代学研究会
2012 年度拡大例会シンポジウム資料集 古代学研究会

中野 咲 2013「大和地域」『古代学研究』第 199 号 特集 集
落から探る古墳時代中期の地域社会（前） 古代学研究会

中野 咲 2021「畿内地域の中期土師器編年と外来系土器」『中
期古墳研究の現状と課題Ⅴ～古墳時代中期の土師器・須恵
器をめぐって～』（中四国前方後円墳研究会第 24 回研究
集会発表要旨集） 中四国前方後円墳研究会

中野 咲 2022「十六面・薬王寺遺跡における古墳時代中期の
土器様相 附：布留遺跡の外来系土器」『国家形成期の近
畿地方における馬と塩の関係に関する基礎的研究』青柳泰
介・繰納民之編 奈良県立橿原考古学研究所

中野 咲 2023「古墳時代中期の北近畿地域における布留系土
器の展開と地域色の発現―刺突痕跡を持つ高坏を中心と
して―」『古墳出現期土器研究』第 10 号 古墳出現期土器
研究会

中野 咲 2024a「南郷遺跡群における古墳時代中期の山陰東
部系土器」『古代学と遺跡学―坂靖さん追悼論文集―』 同
刊行会

中野 咲 2024b「倭人の生活・祭祀からみた渡来人」『月刊考
古学ジャーナル』No. 797 ニューサイエンス社

中野 咲 2024c「古墳時代中期における大和の手工業生産拠
点と外来系土器」国家形成期の手工業生産と家畜利用 文
部科学省科学研究費助成事業学術変革領域研究（A）「動物
考古学から探るユーラシア家畜文化のダイナミズム」中

間報告書 東海大学人文学部

中野 咲・中久保辰夫 2013「韓半島系土器のあり方からみた
集落分類」『古代学研究』第 199 号 古代学研究会

奈良国立文化財研究所 1980『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ
奈良国立文化財研究所学報 37 冊

西中川駿（編） 1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、
馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成 2 年度文部省
科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告

西口壽生 2002「古墳時代の飛鳥・藤原地域」『あすかー以前』
飛鳥資料館図録第 38 冊 奈良文化財研究所飛鳥資料館

林部 均（編） 2008『飛鳥京跡Ⅲ―内郭中枢の調査―』奈良
県立橿原考古学研究所調査報告第 102 冊 奈良県立橿原考
古学研究所

坂 靖 2018『蘇我氏の古代学 飛鳥の渡来人』 六一書房

樋口典昭・松永悦枝 2024「川原寺下層 SD640・SK641 出土土器」
『奈良文化財研究所発掘調査報告 2024』奈良文化財研究所

平松良雄 1993「宇田形台付甕型土器に関する検討」『関西大
学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』 関西大学

松本洋明（編） 1988『十六面・薬王寺遺跡』奈良県史跡名勝
天然記念物調査報告第 54 冊 奈良県立橿原考古学研究所

丸山真史 2017「藤原京十一條朱雀大路推定地から出土した動
物遺存体」『藤原京右京十一條一坊・左京十一條一坊』奈
良県立橿原考古学研究所調査報告第 124 集 奈良県立橿原
考古学研究所

安田龍太郎ほか 2021『飛鳥池遺跡発掘調査報告 本文編（1）
―生産工房関係遺物―』奈良文化財研究所学報第 71 冊
奈良文化財研究所

宮原晋一（編） 2020『京奈和自動車道郡山下ッ道ジャンクシ
ョン建設に伴う遺跡調査報告書―大和郡山市伊豆七条町・
八条町・横田町、天理市南六条町所在―』奈良県文化財調
査報告書第 179 集 奈良県立橿原考古学研究所

図出典

図 1 国土地理院「地理院地図（電子国土 Web）」をもとに作成。
遺跡の範囲は「奈良県遺跡地図 web」による。

図 2 明日香村 2017「1:2,500 地形図 明日香村地形図 2・5」
をもとに作成。

図 3・4：岡崎 1973a・篁園 1973 をもとに作成。

図 5～19・表 1～3：新規作成。